

# **鼎町黒河内遺跡発掘調査報告書**

**1984**

**長野県下伊那郡鼎町教育委員会**

# **鼎町黒河内遺跡発掘調査報告書**

**1984**

**長野県下伊那郡鼎町教育委員会**





## 序

鼎町は東海地区地震強化地域の指定による大規模地震対策事業の一環として鼎町コミュニティー防災センターの建設が昭和58年度事業として中平地籍に建設することになった。予定地は鼎町授産所の隣地で、この地帯は重要な埋蔵文化財包蔵地であり「黒河内遺跡」として指定されており戦前には土師器が出土している。

従って今回の造成工事に先立ち住居跡や遺物が発掘されるものと予期し埋蔵文化財保護の立場から、当教育委員会が緊急発掘調査を行ったものである。

発掘調査は第1期～第4期に分けて実施したが予期どおり古代松川の氾濫による土砂流の堆積等で土質が何層もの砂層をなし表土1.5m～2.0mの深さのところに古墳時代（約1,300年前）の住居跡や遺物が多く発掘された。この遺跡は松川の低位段丘で南西にゆるい傾斜を示し排水、日当り、水利もよく生活立地として拓かれた一大集落をなすものと思考される。

貴重な文化遺産として、この地一帯を記録保存することのできたことは多大のよろこびとするところである。

発掘調査にあたっては調査団長・遮那真周先生、調査担当・遮那藤麻呂先生が担当され、例年にない寒気と周囲の状況から排土作業等、様々な障害を克服して短期間に綿密周到な調査に当られた先生方をはじめ作業に従事された各位に衷心より感謝を申しあげる次第である。

鼎町教育長 関 口 安 穂

## 目 次

序	3
例 言	6
目 次	4
挿 図 目 次	4
図 版 目 次	5
表 目 次	5
I 鼎町の概況	7
II 発掘調査の概要	7
III 遺跡の位置と地形	10
1 周辺の遺跡	12
IV 造構と遺物	14
1 古墳時代住居跡と遺物	14
2 溝 状 造 構	48
3 石 敷 造 構	49
4 その他の遺物	49
V 調査のまとめ	51
1 集落のあり方	51
2 住居跡と土器様相	51
3 鼎町の古墳と集落の関係	52
お わ り に	54

## 挿 図 目 次

第1図 鼎町黒河内遺跡位置図	9
第2図 鼎町代表遺跡分布図	11
第3図 黒河内遺跡造構配置図	13
第4図 黒河内遺跡第1号住居跡実測図	14
第5図 黒河内遺跡第1号住居跡出土土器実測図	15
第6図 黒河内遺跡第2号住居跡実測図	18
第7図 黒河内遺跡第2号住居跡出土土器実測図	20
第8図 黒河内遺跡第2号住居跡出土土器実測図	21
第9図 黒河内遺跡第3号住居跡実測図	22
第10図 黒河内遺跡第3号住居跡出土土器、鉄製品実測図	23
第11図 黒河内遺跡第4号住居跡実測図	26
第12図 黒河内遺跡第4号住居跡出土土器、鉄製品、石製品実測図	28
第13図 黒河内遺跡第5号住居跡実測図	29
第14図 黒河内遺跡第5号住居跡出土土器実測図	32
第15図 黒河内遺跡第5号住居跡出土土器実測図	33
第16図 黒河内遺跡第6号住居跡実測図	34
第17図 黒河内遺跡第6号住居跡出土実測図、第7号住居跡出土石製品、鉄製品実測図	35
第18図 黒河内遺跡第7号住居跡実測図	36
第19図 黒河内遺跡第8号住居跡実測図	37

第20図	黒河内遺跡第8号住居跡出土土器実測図	38
第21図	黒河内遺跡第8号住居跡出土土器実測図	41
第22図	黒河内遺跡第10号住居跡実測図	43
第23図	黒河内遺跡第10号住居跡出土土器実測図	45
第24図	黒河内遺跡第11号住居跡出土土器実測図	46
第25図	黒河内遺跡溝No.2出土土器実測図	48
第26図	黒河内遺跡褐色土出土土器実測図	50
第27図	黒河内遺跡10号住居跡出土蓋坏身内面のスタンプ痕	53

### 写 真 図 版 目 次

図版1	黒河内遺跡近景	55
図版2	黒河内遺跡造構配置	56
図版3	黒河内遺跡1号住居跡、石敷造構	57
図版4	黒河内遺跡2号住居跡、同カマド	58
図版5	黒河内遺跡2号住居跡遺物出土状態	59
図版6	黒河内遺跡3号住居跡、遺物出土状態	60
図版7	黒河内遺跡3号住居跡カマド、同4号住居跡	61
図版8	黒河内遺跡5号住居跡、同カマド	62
図版9	黒河内遺跡5号住居跡カマド、同遺物出土状態	63
図版10	黒河内遺跡6号住居跡、同7号住居跡	64
図版11	黒河内遺跡8号住居跡、同カマド	65
図版12	黒河内遺跡8号住居跡遺物出土状態	66
図版13	黒河内遺跡10号住居跡、同カマド	67
図版14	黒河内遺跡10号住居跡遺物出土状態	68
図版15	黒河内遺跡1、2号住居跡出土土器	69
図版16	黒河内遺跡2号住居跡出土土器	70
図版17	黒河内遺跡3、4号住居跡出土遺物	71
図版18	黒河内遺跡4、5号住居跡出土遺物	72
図版19	黒河内遺跡5、6、7号住居跡出土遺物	73
図版20	黒河内遺跡8号住居跡出土土器	74
図版21	黒河内遺跡8、10号住居跡出土土器	75
図版22	黒河内遺跡10、11号住居跡出土土器	76

### 表 目 次

第1表	黒河内遺跡第1号住居跡出土遺物一覧表	17
第2表	黒河内遺跡第2号住居跡出土遺物一覧表	19
第3表	黒河内遺跡第3号住居跡出土遺物一覧表	24
第4表	黒河内遺跡第4号住居跡出土遺物一覧表	27
第5表	黒河内遺跡第5号住居跡出土遺物一覧表	31
第6表	黒河内遺跡第6号住居跡出土遺物一覧表	34
第7表	黒河内遺跡第8号住居跡出土遺物一覧表	38
第8表	黒河内遺跡第10号住居跡出土遺物一覧表	44
第9表	黒河内遺跡第11号住居跡出土遺物一覧表	47
第10表	黒河内遺跡褐色土出土遺物一覧表	49

## 例　　言

1. 本書は長野県下伊那郡鼎町防災センター建設に伴い当町教育委員会が直営事業として実施した用地内埋蔵文化財包蔵地「黒河内遺跡」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は昭和58年10月29日より昭和59年3月27日まで実施したものである。
3. 調査結果については短期間の整理作業であったため、すべての遺構、遺物について充分な検討を加えることができず、調査によって検出された遺構、遺物などをできる限り図示することに重点をおいて編集してある。
4. 検出された遺構及び出土遺物の実測図の縮尺については図示してある。土器内面の△は内面黒色処理されたものを示す。
5. 出土遺物及び図面類は、すべて鼎町教育委員会文化センター資料展示室に保存、管理されている。なお写真、スライド等多数が存在するが、それらについては鼎町図書館に保管されている。
6. 本書の編集は鼎町教育委員会吉沢　誠、調査団の遠那　藤麻呂があたった。

## I 鼎町の概況

鼎町は長野県の南部にあたり、下伊那郡のはば中央に位置し、天竜川の支流である飯田松川により旧飯田市と境を接している。鼎町は東西 5.3 km、南北 4.7 km、周囲 18.2 km でありほぼ南北に細長い小地域で、海拔は最高位で 625.0 m、最低位 417.0 m を計る。鼎町は飯田松川の氾濫原である冲積地である切石下段、上茶屋、中平、西鼎、東鼎、さらに上段には切石上段部や上山などが位置し、これより上段に矢高原、名古熊、一色などそれぞれ段丘面が発達している。これらの段丘面は、天竜川の一大支流である飯田松川が洪積期に氾濫し大きな扇状地を形成し、その広がりは鳳越山麓の丸山、羽場、飯田市街地、南方は鼎町全域、伊賀良北方、殿岡、三日市場、さらに駄科、時又、桐林にまで及び、大扇状地を形成した松川は、天竜川の下流に伴い流路は低下し、この大扇状地を解析し、側漫食によって河岸段丘を形成したものが、鼎町の各段丘面である。こうした地形の発達と、飯田松川の存在は古来より鼎町にとって重要なかかわりを示している。また多くの段丘崖下部一帯は豊富な湧水を得られる一方、飯田松川からの引水の正史は古く、東西に傾斜する地形を利用し、伊賀良井を基幹として十数条の井筋が存在し水利の恩恵を多分に受け、今日まで発展しつづけている。

## II 発掘調査の概要

1. 遺跡名 黒河内遺跡（鼎町遺跡台帳No15 全国遺跡地図なし 県遺跡台帳No17）
2. 遺跡所在地 長野県下伊那郡鼎町大字鼎 1958番地1
3. 調査主体者 鼎町教育委員会
4. 発掘調査期間 昭和58年10月29日より昭和59年3月27日
5. 発掘調査面積 1,389.55 m<sup>2</sup>全面発掘
6. 発掘調査の方法

鼎町防災センター建設に伴うものであり、永久構築物下になる用地内の埋蔵文化財の記録保存を目的とした緊急発掘調査である。用地はすでに町有地として確保済みであり、防災センター建設の計画が決まっていた。町教育委員会は埋蔵文化財保護の立場より、防災センター用地に隣接する畠地より以前に出土した古墳時代土器類の出土を確認しているとともに、遺跡の広がりもかなり広範囲にわたるものと推定し、用地内に限定して発掘調査の実施計画を立て、学術的価値ある報告書として永く活用できる内容を有するものとしてまとめる目的としたのである。

発掘調査は、全面発掘を条件として用地内南北中心ライン及び東西中心ラインを設定し、それよ

り8m×8mの大グリットを設定した。さらにそれを2m×2mに分割し調査を進めるという方法を取ったが、遺構面までが予想以上に深く、遺構面確認と同時にグリット方式を省略して重機による全面排土の方法に変えたが、用地内のみで土の移動を強いられ、調査団としてはもっとも調査に困難をきたした。

調査中の記録としては、遺物の出土は各グリットごとに処理し、遺構確認後はそれぞれの遺構ごとにNoを付して取り上げてある。幸いにも遺構がすべて単独であると同時に出土遺物数も遺構確認数に比して比較的少なく、見落し等の数はほとんど無に等しい。現地における主要出土遺物については、写真撮影及び図面類記入まで原位置で保存しその後に取り上げている。記録等については、すべて写真撮影後に実施し出土位置及びレベル等計測済みのものより順次Noを付して取り上げている。また「住居跡カード」「遺物カード」等は現地においてできるだけ明確に記録し「調査日誌」は主に調査団長によるものとした。

出土遺物の整理は、遺構内より主にまとめて出土したものと接合、復原を主におき、遺構外出土のものは集中出土したものののみ復原してあるが、その数はきわめて少ない。

土器の実測図は復原されたものはすべて計測し、破片であっても何を残すものは反転実測を行ったが、その数はきわめて少々であり、大部分の出土遺物はわずかな欠損で全体の器形を知ることが可能であり、本報告書に図示してある。

黒河内遺跡は過去において調査された事がなく、以前に土師器壺形土器二点の出土を知るのみであった。昭和58年町史編纂に伴い町内の詳細遺跡分布調査及び町内出土の考古資料再確認の調査を実施し、黒河内遺跡出土の土器が注目され、古墳時代の集落の存在が推定された。今回の調査では古墳時代の住居跡10棟と多くの出土遺物が発見され、さらに集落は広がる可能性が認められた。

調査中の毎日の結果は、町有線放送による「今日のわだい」に取り上げ、その後の結果については、「公報かなえ」等にその成果を公にしており、住民より高い関心がもたらされた。なお、現地調査時には、町教育委員会によって「生きた教材」として保育園児、小学生、中学生、町民などによる見学が相次ぎ、町民の関心はとみに高まった。

調査後は町老人学級の開催による「鼎町の歴史」と題し、原始より継続中でありよろこばしいことである。その後は整理作業、報告書作成作業を実施した。

特に本年は雪積が多く、また驚異的な寒さにみまわれ冬期間の調査を中止し遺構、遺物の保護をはかるとともに、用地内に存在した建造物下の調査など様々な障害に当り、また用地内のみで排土の移動など、きわめて困難をきたした調査であったことを特筆しておく。



(1 : 7000)

第1図 鼎町黒河内遺跡位置図

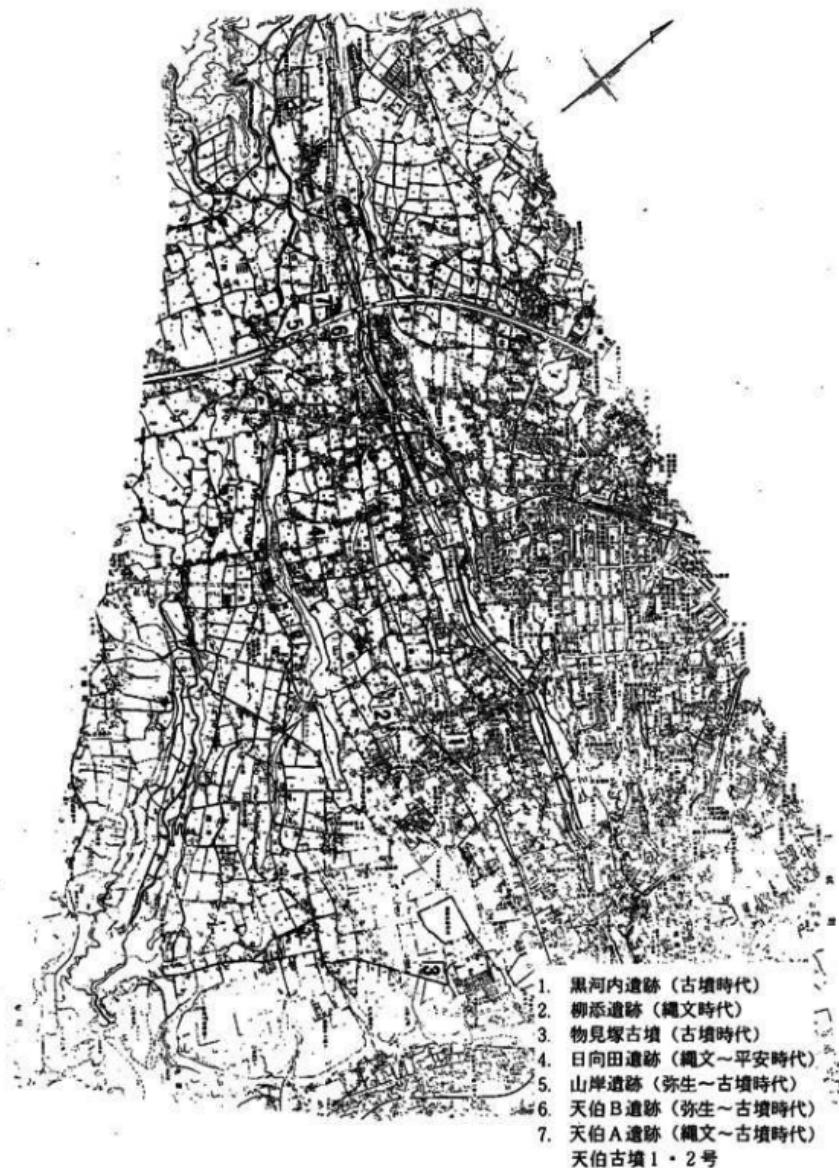
### III 遺跡の位置と地形

黒河内遺跡は、長野県下伊那郡鼎町中平1958番1に所在する古墳時代の遺跡である。天竜川の支流である飯田松川は、飯田市と鼎町の境界線であり、本遺跡は鼎町の中心部国鉄飯田線鼎駅の西方約150mに位置し、松川の現河床に続く最も低位段丘にあたり松川の右岸に位置している。

鼎町には大きく4つの段丘面が認められ、最も低位段丘は遺跡の存在する中平、上茶屋、下茶屋、東鼎、西鼎などと切石の松川沿いの地域であり、上郷南条を模式地とする南条面に相当し、現河床との比高は2~3m程度である。この段丘の境線を示すのは、松尾堀割りより鼎矢高神社下で分かれ、法藏寺、上山公民館、切石駅、天伯神社へとつづく段丘崖により明瞭に認めることができる。第二の段丘は、上山全域、切石全域がこれにあたり、上郷町別府を模式地とする別府面であり、南条面の上段ではあるが低位の段丘である。この面では火山灰は認めないとされるが、鼎町上山地域では火山灰の認められる地域が存在する。第三の段丘面は、鼎町における最上位段丘であり、その境線は、矢高神社下で分かれ、下伊那農学校、一色神社を経て切石にいたる段丘崖で区画されるものであり八幡原面と言われるもので模式地は飯田市八幡原であり、標高460m~480mを計る。さらに下伊那農学校より八幡常盤台に発達する段丘面があり、これが第四の段丘である。これは喬木村伊久間を模式地とする伊久間面と言われるもので、矢高神社、長姫高校の所在する面がそれにあたる。

このように鼎町もいくつかの段丘面が発達しているが、それぞれの段丘上には各時代を通じ、生活の場が多く認められている。特に最も下位段丘にあたる中平黒河内遺跡付近は、飯田松川の氾濫をいくどなく受けたらしく、砂層の堆積がなん層にも認められた。黒河内遺跡はほぼ東西にゆるく傾斜する地形を示し、南側の現国鉄飯田線が通過する地帯に向かいわざかな凹地が認められる。現在のところ遺跡の位する最下位段丘上からは、黒河内遺跡の存在のみ確認されているだけであるが、黒河内遺跡例のごとく砂層を掘り込んで住居跡を構築しており、わざかな微高地を選び生活の場としていたらしく、その他の地域からも小集落の発見される可能性は充分想定される。

遺跡南側に現鼎中学校が位置する第二段目の段丘が発達するが、この段丘上からは多くの遺跡が認められている。黒河内遺跡より東方は飯田松川の氾濫原が広く開け松尾地域へとつづく。



第2図 鼎町代表遺跡分布図

## 1 周辺の遺跡

いくつかの段丘面が発達する鼎町は、遺跡立地の条件も良好であり、比較的多くの埋蔵文化財含む遺跡が確認されている。最近の町史編纂に伴う町内の遺物保管状況調査においては、縄文時代より歴史時代に至るまで様々な遺物が個人によって保管されている。

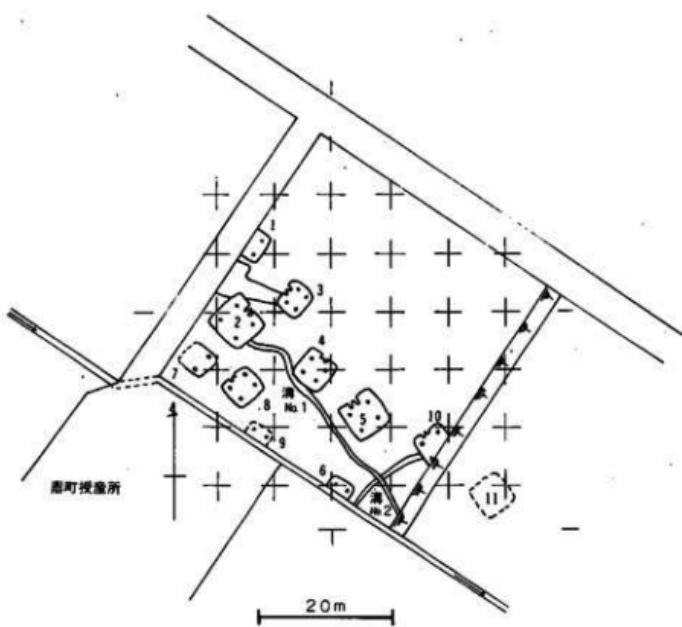
大正時代における鳥居龍藏氏による「下伊那の先史及び原始時代」によれば、遺跡数はさほど多く確認されてはいないが、その後における分布調査などにより広範囲にわたって分布している事実が明らかにされている。

黒河内遺跡を中心として、鼎町の代表遺跡を上げてみると、当遺跡の西約70mほどの現鼎中学校の位置する段丘上に柳添遺跡と代田遺跡が存在する。柳添遺跡は現在果樹園となっているが、ここからは縄文時代より古墳時代に至る多量な出土遺物が確認されている。この遺跡は縄文時代中期後半期の土器を中心に出土しており、その分布範囲も比較的広範囲におよんでいる。柳添遺跡に接し代田遺跡が存在する。以前町道改修工事の際縄文中期勝坂期の完形大形深鉢の出土と住居跡が発見されている。同段丘にあたるが上山地籍に存在する日向田遺跡から多くの遺物が出土しており、この遺跡も縄文時代より平安時代にわたる集落跡の存在が推定される。これらの遺跡はともに調査されたことがないが、恵まれた段丘面に位置し段丘先端部にも数ヶ所の遺跡が確認されており注目すべき地域と言える。現状は水田地帯が多く遺跡保存の状態はきわめて良好であり、今後の調査に期待したい地域である。

昭和45年中央自動車道建設に伴い、切石の山岸遺跡が中央道遺跡調査会によって調査され、弥生時代及び古墳時代の大集落跡が発見された。さらに昭和49年同調査会による天伯B遺跡と、鼎町教育委員会による保育園建設に伴う天伯A遺跡が同時調査された。天伯B遺跡からは弥生時代の方形周溝墓及び古墳時代の住居跡、また天伯A遺跡からは縄文時代の住居跡、弥生時代の方形周溝墓、後期古墳二基が確認されている。これら三遺跡は同一地域に存在し各時期を通じ大規模な集落が営まれたようであり、それぞれの集落のあり方、墓域のあり方、特に古墳時代における祭祀址の発見は注目される調査結果が報告されている。

鼎町でも上位の段丘にあたり矢高神社の存在する段丘面には猿小場、矢高原遺跡などが存在する。現長姫高校所在地域は、昭和53年飯田市教育委員会により猿小場遺跡の調査が実施され弥生時代より歴史時代にわたり住居跡をはじめとする多くの出土遺物などが発見されている。また矢高原遺跡は運動公園建設に伴い鼎町教育委員会により調査が実施され、その結果はすでに公にされている。さらに名古熊、一色地籍からも遺物の出土が知られており多くの遺跡の存在が認められる。

古墳については、松川に面する段丘崖上に点々と列状に構築されている一方、伊賀良西の原につく一色より矢高神社に至る段丘先端や、八幡原段丘先端などに存在し、古墳時代の集落跡との関係上きわめて注目される位置に構築されているのである。



第3図 黒河内遺跡遺構配置図

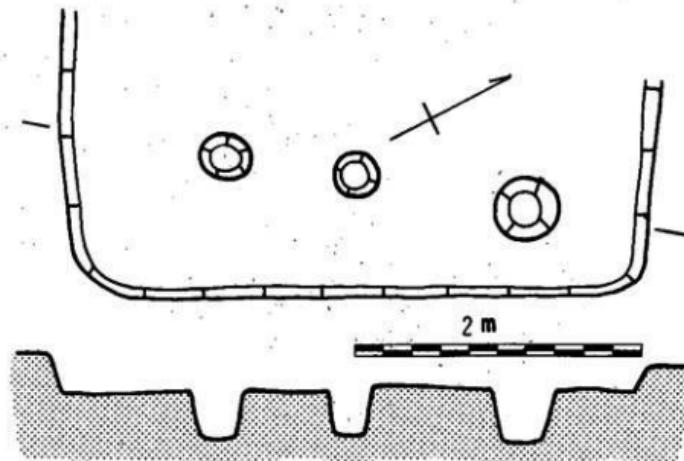
## IV 遺構と遺物

### 1 古墳時代住居跡と遺物

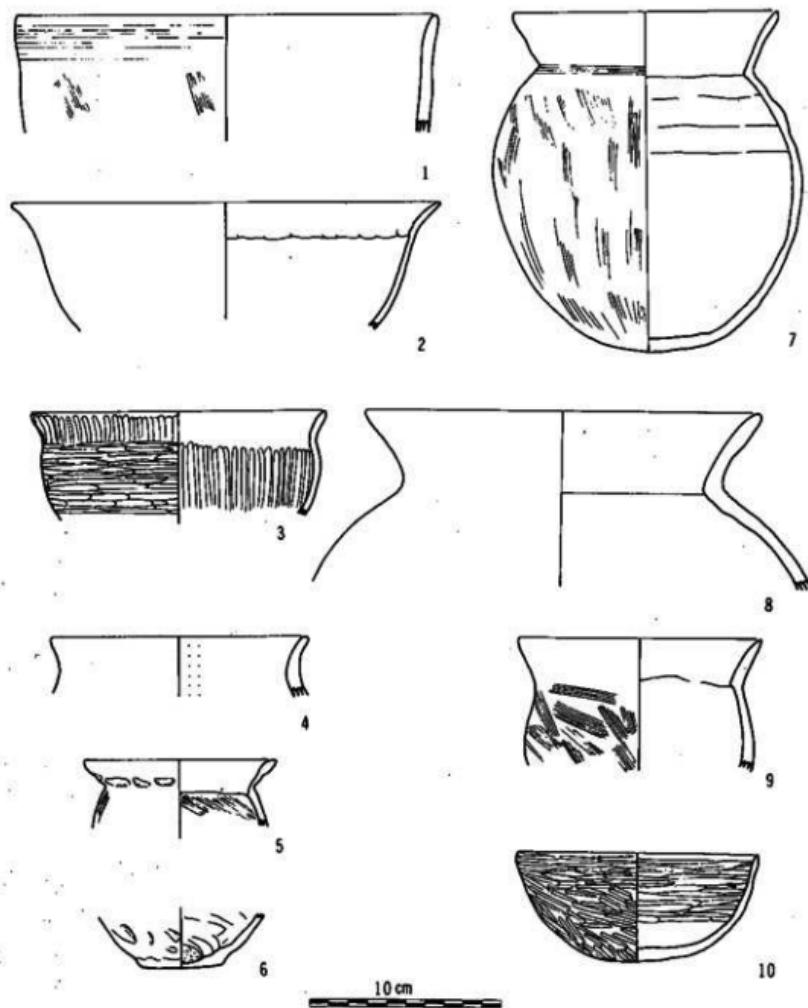
#### 1号住居跡（第4図）

遺構 防災センター建設用地と授産所に入る道路寄りに発見された住居跡であり、大部分が道路下のため約1/2の調査に止まった。確認された部分は東側のみであるが、南北4.15mを計る方形竪穴プランを有する住居跡である。カマドの位置については不明であるが、調査された住居跡の中に壁北側の中央部と、西側中央部に存在するものがあり、1号住居跡はいずれの位置にカマドがあるかは不明である。住居跡は砂層を掘り込んで構築されるものであり、壁高は南側で約30cm、北側で20cmを測り、やや傾斜した状態で掘り込まれる。床面は砂層のため軟弱であり、柱穴は3ヶ所認められコーナー寄りの2本が主柱穴である。

遺物（第5図） 調査面積はごくわずかであったが、多くの土師器が出土している。同図1～10がそれであり、瓶、甕、碗、坏などが認められる。同図1は単孔を有する瓢形土器で比較的大形なものである。同図2、3は鉢形土器でありいずれも大形を有し、器壁は両種ともに薄く形態に若干の変化が認められる。それらは口縁部における立ち上がり部分であり1にあっては、きわめてゆるやかに大きく外反するのに対し2は、比較的強い立ち上がりを示す。同図4～9は壺形土器であり、形態は様々である。5、6はきわめて小形なものであり同一個体と推定されるもので、製作は



第4図 黒河内遺跡第1号住居跡実測図



第5図 黒河内遺跡第1号住居跡出土土器実測図

きわめて難に作られている。4, 9は比較的ずんぐりした形態を示すものであろう。7は住居跡東側壁直下より出土したものであり底部は丸底で胴部はほぼ球形に近い。頸部のクビレは強く口縁部はやや外反する。8はきわめて大形な壺形土器で胴部以下を欠損している。器壁も厚く口縁部も大きく外反しており、胴部以下も長胴にはならないであろう。同図10は壺形土器であり半球状の形態を示し器高も比較的高い。（第1表参照）

## 2号住居跡（第6図）

遺構 1号住居跡の南に発見された比較的大形な竪穴式住居跡であり、東南壁長がややみじかい変形を示している。北西壁長さ5.80m, 西壁5.85m, 南壁5.0m, 北東壁5.50mを計る台形状の形態を示す。

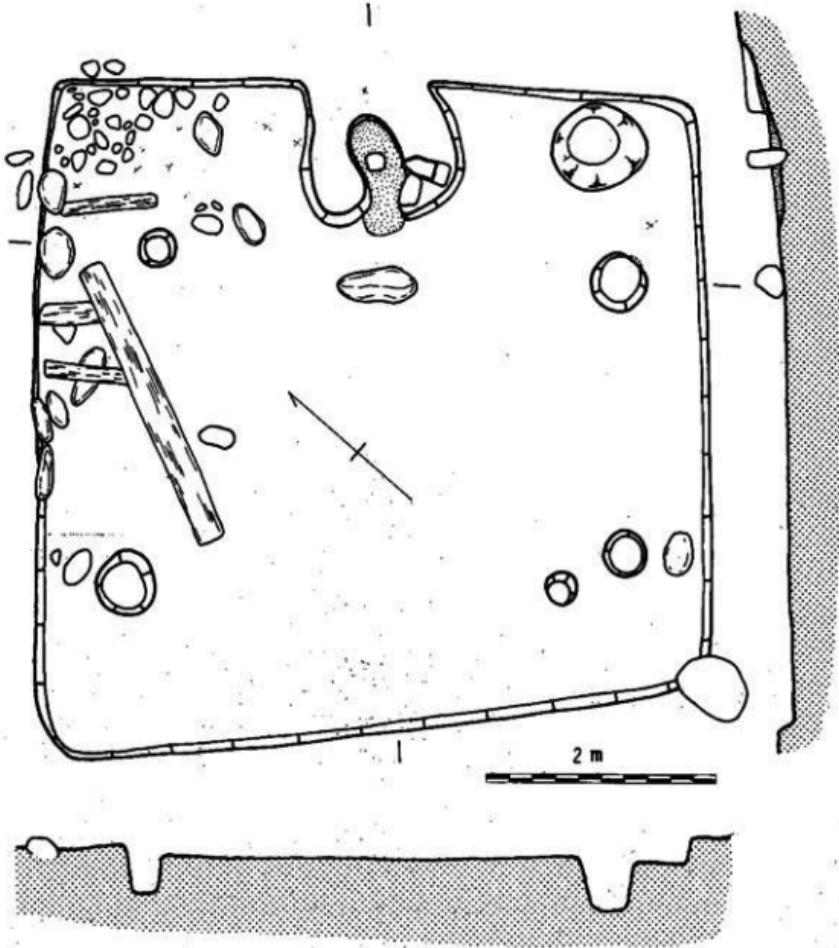
住居跡は砂層を掘り込むがその掘り込みは深い所で25cm, 深い所で3cmほどであった。カマドは北東壁ほぼ中央に構築され、焚口右袖先端に2個の石を使用する粘土製カマドである。カマド中央には支脚となる河原石を立て焚口の天井石はカマド前面の床面にはずされておかれている。主柱穴は4本であり、南側コーナーのみ支柱穴1個が存在する。またカマド東側コーナーに径80cm, 深さ40cm程の貯蔵穴を備えている。床面は砂層のため軟弱であるがカマド周辺部は硬くふみかためられている。特に北側コーナー付近の床面には多くの転石が存在し、それらを取りのぞかず住居跡は構築されている。またこの付近には多くの木炭が認められるとともに、遺物類も集中的に出土しており、火災に遭った住居と推定される。遺物類はカマド西側及び東側に集中しているが、西側の床面は多くの河原石が認められた。これらは2号住居跡の北側の3号住居跡にむかい石敷様の遺構が存在するので、これとの関係が存在するのかもしれない。

遺物 土師器のみ出土しているが比較的まとまった資料が得られている。第7図、第8図がそれであり、第7図1～4は壺形土器であり、同図1は丸底を有する小形壺であり器壁全面に斜めヘラによる整形痕が認められる。一方内面は輪積痕が明瞭に認めることができるとともに櫛歯状工具による平行沈線が認められる。同図5は大形な壺形土器であり頸部がきわめて強くクビレ、胴部は班形をなすもので底部は丸底の中央がやや凹むものである。胴部はタテヘラみがきがかけられ、内面は斜ヘラによる整形痕が認められる。口縁部は強く外反するものである。同図2～4は小形壺形土器であり、3, 4は丸底を有し形態が若干異なる。2は口径が低く平底を有し口縁部と立ち上がりも弱い。

第8図1, 2は壺形土器であり比較的大形なものである。1は底部に単孔を有し内外面ともにタテヘラみがきがほどこされる。2は胴部以下を欠損するため器高等は不明であるが、おそらく1同様の形態を示す壺形土器と推定される。同図3～11は壺形土器であり形態的にいくつかに分けられるが、特殊な形態が存在する。特に法量的に異なるものがあり同図5, 10, 11等は碗形土器にふくめた方が適当かもしれない。3, 5, 9, 11は内面黒色処理されており、また3, 5～9, 11は暗文が認められる。11は内面の縁部付近に櫛歯状工具による整形痕が認められる。さらに第7図4、第8図6, 7, 9は底部内面の器面が荒れており良く使用されたようである。（第2表）

第1表 黒河内遺跡第1号住居跡出土遺物一覧表（第5回）

遺物番号	器種	法量(cm)		形態上の特徴	手法上の特徴(技法)	胎土	焼成	色	調査	出土状態	種類	備考
		器高	口径									
1	瓶	22.0	21.2	輪郭、円筒形	ヨコナデ、内面へラみがき ナナメハケ	小 石	良好	黄褐色	床	土師器		
2	瓶	22.3	19.0	輪郭、薄作り	ヨコナデ ヘラみがき	小 砂	良好	黄色	床	土師器	口縁端ざら砂壁あれ	
3	瓶	15.4	14.5	口縁や外反	タテヘラみがき、ヨコナデ ヨコヘラみがき	小 砂	良好	褐色	北へキ	土師器		
4	甕	13.3	13.5	口縁ゆるやかに外反	ヨコナデ、ヘラみがき	小 砂	良好	赤褐色	黑色處理	土師器		
5	甕	10.0	9.7	輪郭、作面直	ヨコナデ、ナナメハケ	小 砂	良好	黄褐色	床	土師器		
6	甕	3.7	3.7	輪郭、指壓痕	ヘラケズリ	小 砂	良好	暗茶褐色	床	土師器		
7	甕	17.4	13.8	丸	18.0 輪郭	ヨコナデ、タテハケナデ	小 砂	暗黒褐色	東へキ	土師器		
8	甕	20.5	26.0	輪郭	口縁、ヨコナデ 輪郭、みがき 内面、ヨコハケナデ	石英多量	良好	黄褐色	床	土師器		
9	甕	12.6	12.0	輪郭、ゆるやかに外反	ヨコヘラみがき 内面底部ヘナデ	小 砂	良好	暗茶褐色	床	土師器		
10	环	5.6	12.5	丸	12.0 半球状	ヨコヘラみがき 内面底部ヘナデ	小 砂	良好	黄褐色	床	土師器	モミ痕あり



第6図 黒河内遺跡第2号住居跡実測図

黑河內第2号住居跡出土遺物一覽表

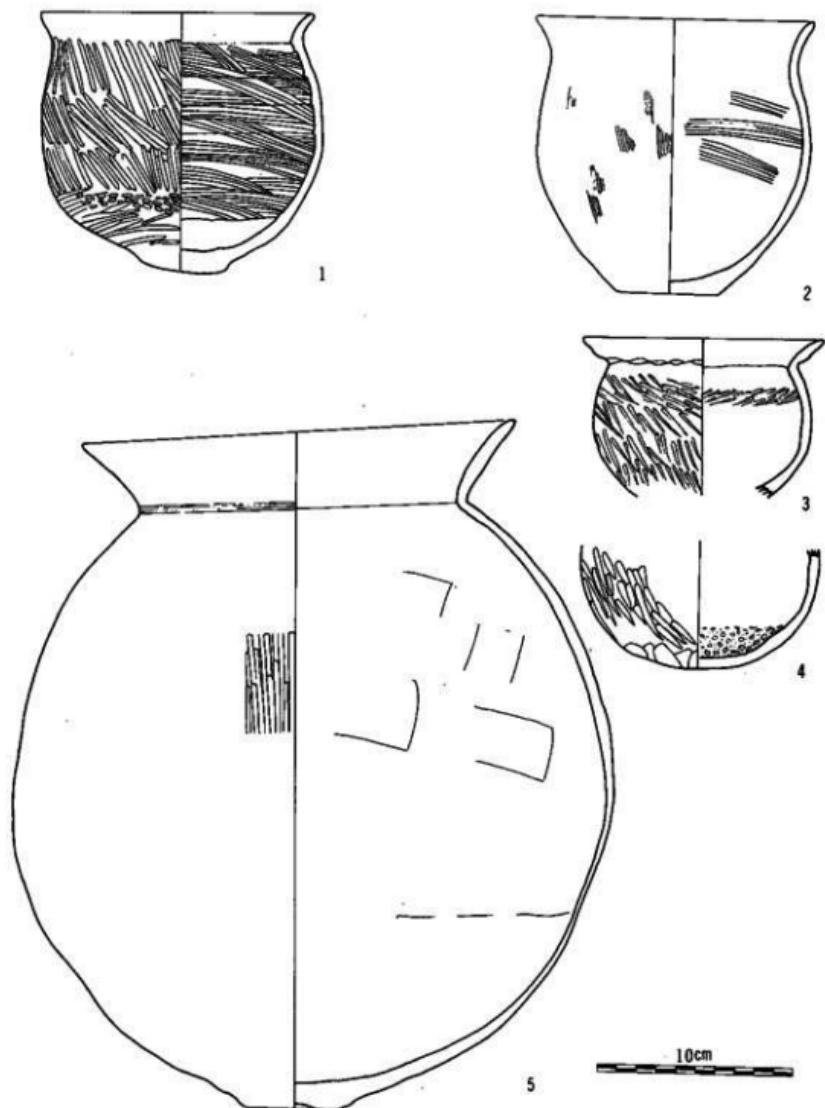
（第7回）

遺物番号	留法量(cm)	形態上の特徴		手法上の特徴(技法)	出土状態	調査面	備考	
		幅高	口径	底径	体质	地土	外面	内面
1 瓶	13	13.8	4.5	14.5	輪縁、口縁ゆるやかに外反 底部平底	ナナメヘラみがき コナメナデ	少少 多量	カマド西 カマド西
2 瓶	13.7	14.0	5.0	14.0	口縁ゆるやかに外反 輪縁、口縁ゆるやかに外反	ナナメヘラみがきナデ	少少 多量	土師器 土師器
3 瓶	12.3	丸底か		11.0	輪縁、口縁強く外反	ナナメヘラみがき 底部へ斜けり	小石	土師器 土師器
4 瓶		丸底		12.0	輪縁、肩部球形 輪縁、口縁強く外反	ナナメヘラみがき ヨコナズシ、肩部へラナデ ヨコヘラスシ、肩部へラナデ	少少 多量	土師器 土師器
5 瓶	33.8	22.2	4.8	30.5	輪縁、口縁強く外反 底部球形	ヨコヘラスシ、肩部へラナデ	小石 多量	土師器 土師器

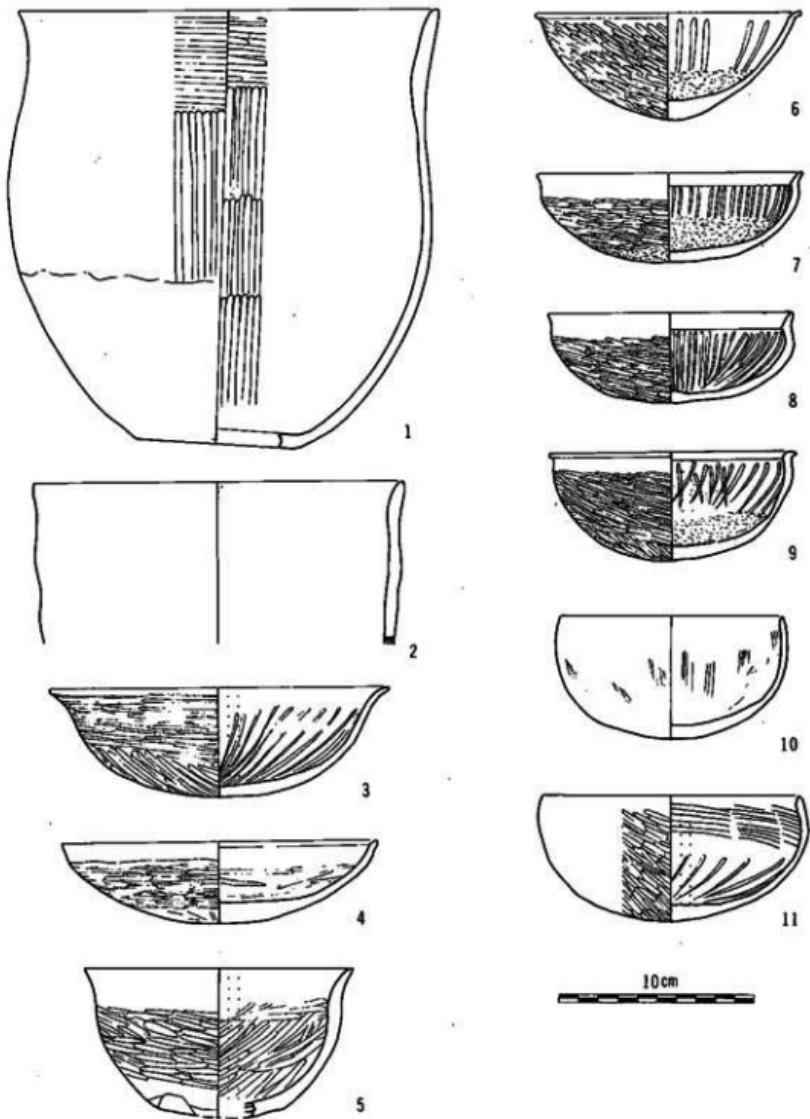
長江河內第2号住居跡出土遺物一覽表

四八

遺物種類	器種	形態上の特徴			手造上の特徴			胎土			出土状態			調査	層	備考
		縦高	口径	底径	体径	(枝)	柱	微孔	成形	外側	内面	調査				
1 瓶	瓶	21.8	21.5	8.0	21.5	輪様、肩部若干はる。	ヨコヘラムがき ヨコナデラムがき ヨコナメラムがき ヨコヘラム、ナナメラムがき ヨコナデラムがき ヨコヘラムがき	小砂 石英多量	良好	黒色 黄褐色	褐色 褐色	カマド西	土師器	土師器	土師器	
2 板	板	18.8			18.6	輪様、輪様	ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき	小砂 石英多量	良好	黒色 黒褐色	褐色 褐色	カマド西	土師器	土師器	土師器	
3 坯	坯	5.5	17.4	丸	14.5	口縁大きく外反	ヨコヘラム、ナナメラムがき ヨコヘラムがき ヨコヘラムがき ヨコヘラムがき ヨコヘラムがき ヨコヘラムがき	小砂 小石	良好	黒色 褐色	褐色 褐色	カマド西	土師器	土師器	土師器	
4 坯	坯	4.0	16.0	丸	14.5	口縁、三ヶ月状に立ち上がる 底部部厚い	ヨコヘラムがき ヨコヘラムがき ヨコヘラムがき ヨコヘラムがき ヨコヘラムがき ヨコヘラムがき	ウムモ多量 小石多量	良好	黒色 赤褐色	褐色 赤褐色	カマド西	土師器	土師器	土師器	
5 瓢	瓢	7.5	13.8	4.0	12.4	高高く、壁厚	ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき	小砂多量 小石多量	良好	褐色 茶褐色	褐色 赤褐色	カマド西	土師器	土師器	土師器	
6 坯	坯	4.9	13.5	丸	12.2	底盤尖り状九底	ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき	小砂多量 小石多量	良好	褐色 茶褐色	褐色 赤褐色	カマド西	土師器	土師器	土師器	
7 坯	坯	4.0	13.5	丸	13.2	口縁内側鋸歯有り 半月状形態	ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき	小石多量	良好	褐色 茶褐色	褐色 赤褐色	カマド西	土師器	土師器	土師器	
8 坯	坯	4.0	12.5	丸	12.3	口縁や底部有り 調節やよくくらみ	ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき	小石多量	良好	褐色 茶褐色	褐色 赤褐色	カマド東	土師器	土師器	土師器	
9 坯	坯	5.6	12.7	丸	12.2	口縁鋸歯 底盤鋸歯 半球状	ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき	小石多量	良好	白色 暗褐色	褐色 褐色	カマド上	土師器	土師器	土師器	
10 瓢	瓢	6.3	11.4	丸	11.8	底盤くらみ 半球状	ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき	小石多量	良好	褐色 茶褐色	褐色 褐色	カマド上	土師器	土師器	土師器	
11 瓢	瓢	6.4	13.2	丸	13.8	半球状 口縁やや内凹	ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき ヨコナメラムがき	小砂	良好	黑色 暗褐色	褐色 褐色	カマド上	土師器	土師器	土師器	



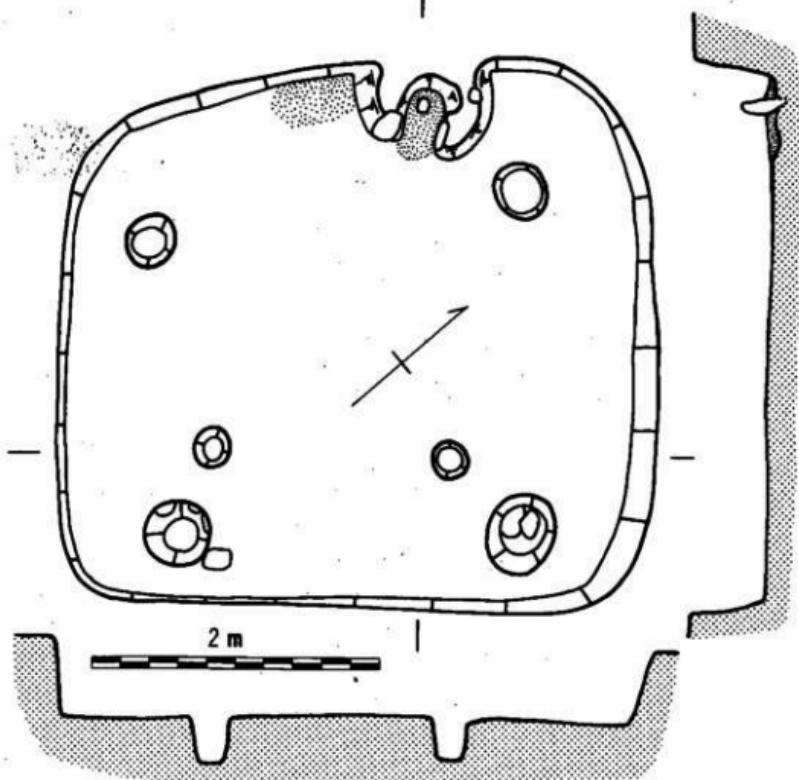
第7図 黒河内遺跡第2号住居跡出土土器実測図



第8図 黒河内遺跡第2号住居跡出土土器実測図

### 3号住居跡（第9図）

造構 2号住居跡の北東側に発見されたもので小形な住居跡である。東南壁長3.65m北東壁長3.60m北西壁長3.0m、南北壁長3.0mを計る隅丸方形の竪穴住居跡である。この住居跡も砂層を掘り込んで構築されているが、壁高は平均して50cm程であり垂直に近い。カマドは北西壁中央よりやや北側に寄った位置に構築されているが比較的小さい。カマド両袖先端に河原石を使用するのみであり両袖ともに粘土により築造されている。また中央部には支脚となる長方形の河原石を直立させており、壘形土器（第10図2）が置かれていた。カマド内は良く焼けており厚さ約7cmの焼土が堆積していた。さらにカマド左側床面にも焼土の堆積が認められた。柱穴は各コーナー寄りに4ヶ所の主柱穴と、東南主柱穴の近くにそれぞれ1ヶ所ずつの支柱穴の存在が認められた。床面は全体に



第9図 黒河内遺跡第3号住居跡実測図

良好であり特にカマド前面は良く踏みかためられていた。この住居跡はカマド前面の覆土中に人頭大の河原石が床面より10cm程ういた位置より集中的に発見されている。遺物類はカマド周辺部より出土している。貯蔵穴の存在は不明であった。

遺物 土師器及び須恵器、鉄製品の出土がある。第4図1～7は土師器、8～10が須恵器であり11は鉄鎌である。同図1～3は壺形土器であり、1は住居跡北側コーナー寄りの床面より出土している。口縁部より胴下半部まで内外面ともにハケ状工具による整形がなされている。胴下半部の内面は輪積痕が明瞭に認められる。同図2はカマド内支脚上に置かれていたもので、やや長胴を有するものである。頸部のクビレは1同様強いが、器外面はタテヘラによるみがきがかけられている。

底部は丸底を有し安定しない。内面は胴上半部に輪積痕がのこされている。3も壺形土器であり胴下半部を欠損する。4は小形な丸底を有すると推定される。5はきわめて小形な壺であるが、底部を欠損している。内面には暗文が認められる。6、7は壺であり両種ともに法量は異なるが同様な形態を示し、半月状に立ち上がるるものである。器外面はヘラみがきがほどこされている。8、9は須恵器蓋壺の身と蓋である。10は須恵器で平瓶の頸部である。11は鉄鎌である。（第3表）

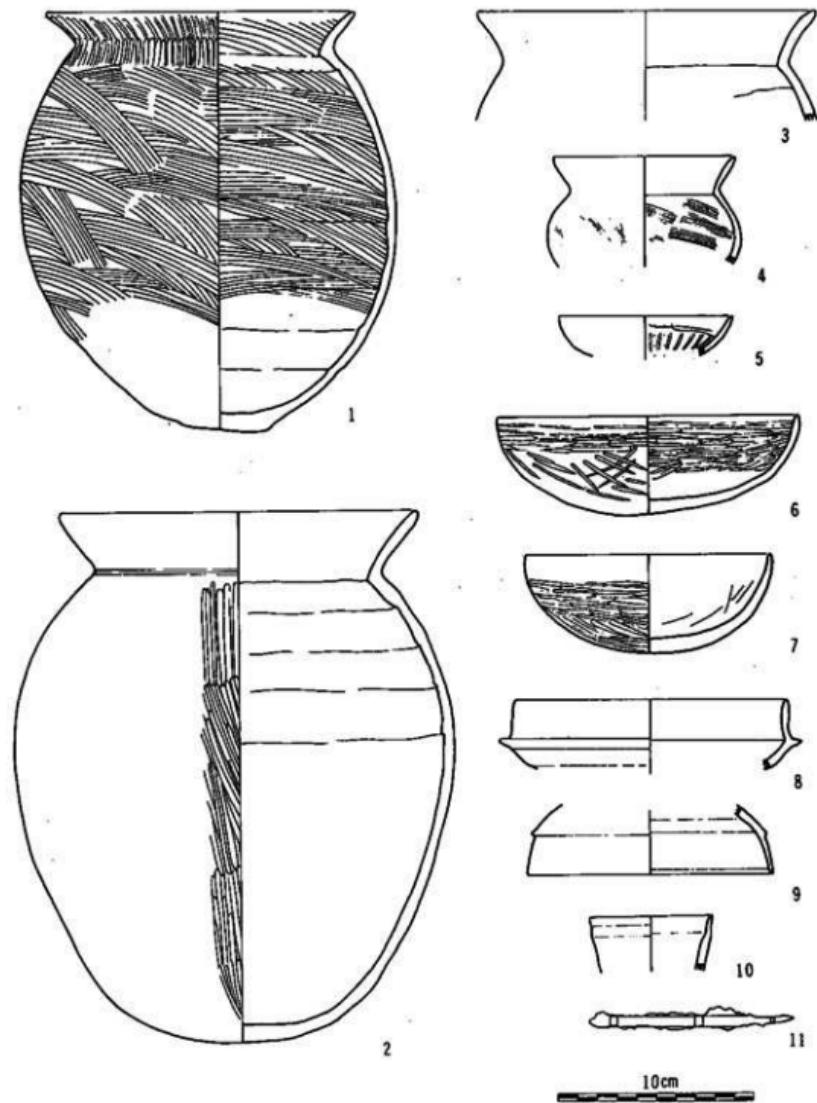
#### 4号住居跡（第11図）

遺構 3号住居跡の南に発見されたものであり、南北4.85m、東西4.65mを計るほぼ方形の堅穴住居跡である。カマドは北壁の中央にあり、全体を粘土によって構築されるものであった。住居跡の掘り込みは砂層を約30cm程掘り込むものであり、壁は垂直に近い。柱穴は各々対角線上にあり、方形の貯蔵穴が南壁に接して存在する。この部分は他の床面よりわずかに低くなっている。床面は、全体に良好であるが、カマド周辺部が特に良い。また床面上に人頭大から拳大の自然石が点在している。東壁主柱穴内や壁寄りに円形の穴が認められるがその性格は不明である。カマド内部は良く焼けており、約7～8cmの焼土の堆積が認められる。両袖とともに石の使用は認められない。

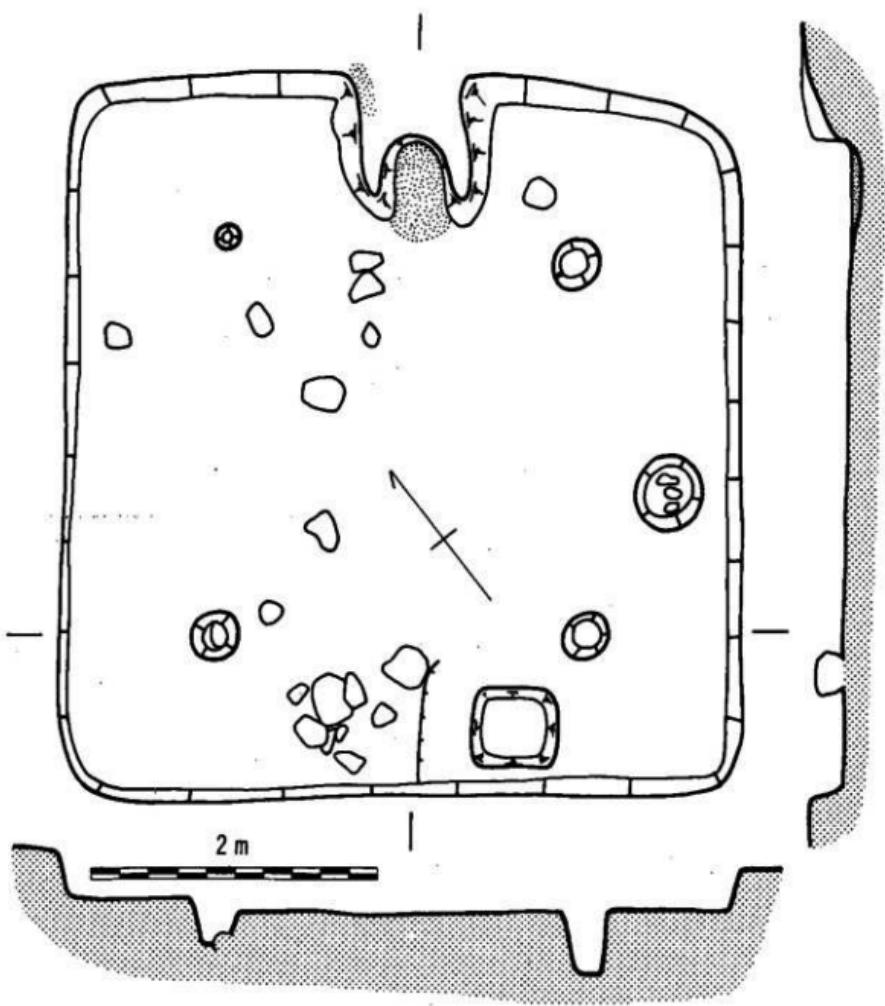
遺物 土師器、須恵器、鉄製品、石製品、土製品等が出土しており、第12図に示すものがそれである。1～4は壺形土器であり、1、2は長胴形を有するものであろう。いずれも胴下半部を欠損するため全体の器形は知ることができないが、底部は丸底状をなすものと推定される。両袖ともに器外面はハケ調整が認められ、内面には輪積痕が明瞭に止めている。同図3は底部を欠損するが小形の丸底状土器である。4は器壁の部厚い小形壺形土器であり底部は平底状をなすが中央部がわずかに凹むものである。全体の器形はきわめて不整形である。5～8は壺でありそれぞれ口縁部に相違が認められる。4種ともに器外面はヨコヘラみがきがなされるが、特に6の壺は非常に器壁がうすい一方、内面に暗文が認められる。9は須恵器蓋壺の身の部分であるが口縁部を欠損し、比較的小形である。10は鉄鎌であり基部に木質部が遺存している。11は紡錘車でありカマド東側床面より出土した。断面台形をなし、裏面には複雑な沈線が認められる。12は土製品であるがなんであるかは不明である。（第4表）

第3表 黒河内3号住居跡出土遺物一覧表(第10回)

遺物番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴		手法上の特徴 (技法)		土	輪	出	土	性	状	種類	備考
		器高	口径	底径	体径		外	面								
1	壺	21.0	15.8	4.5	19.2	輪況:九厘 口縁強く外反	ヨコヘラ、脚下らがき ヲナメヘラ	小	砂	良好	暗黒色	暗黒色	北	床	土師器	
2	壺	27.0	18.2	丸底	22.5	長胴形 口縁強く外反、輪情況	ヨコナデ ヲナメヘラらがき	小	砂	良好	暗褐色	褐色	カマド内	土師器	土師器	
3	壺					口縁ゆるやかに外反 輪情況	ミガキ	小	砂	良好	暗褐色	褐色	色	床	土師器	
4	小形丸壺					輪情況 口縁や外反	ヨコナデ ハケナデ	小	石	良好	茶褐色	褐色	色	床	土師器	
5	小形壺					半月状	ヘラナデ;暗文 内面黑色處理	小	砂	良好	茶褐色	暗茶褐色	色	床	土師器	
6	壺	5.0	15.5	丸底	15.2	半月状	ヨコヘラ、ナナメヘラみがき ヨコヘラらがきをヘラで 口縁内、外器壁あれる	小	石	良好	暗褐色	褐色	カマド内から土 出	土師器	土師器	
7	壺	5.0	12.6	丸底	12.5	半月状	回転ヘラけずり ナデ調整	小砂多量	良好	暗黒褐色	褐色	色	床	須惠器	須惠器	
8	蓋環(身)					口縁や内面 受け留強く外崩へ 操作りや外反	回転ヘラけずり ナデ調整	密	良好	暗灰色	暗灰色	色	床	須惠器	須惠器	
9	蓋環(蓋)					口縁薄く直立	ナデ調整	密	良好	暗灰色	暗灰色	色	床	須惠器	須惠器	
10	平瓶															



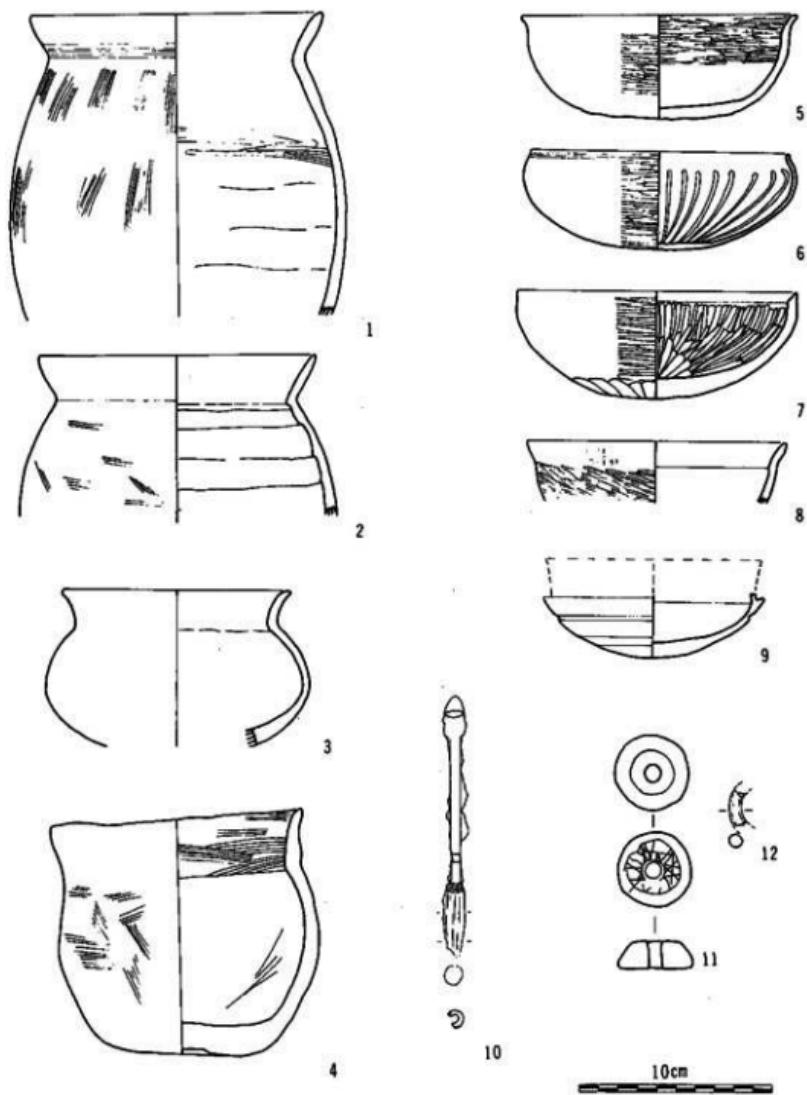
第10図 黒河内遺跡第3号出土土器、鉄製器実測図



第11図 黒河内遺跡第4号住居跡実測図

第4表 黒河内4号住居跡出土遺物一覧表 (第12回)

遺物番号	器種	器高 (cm)	口径 (cm)	底径 (cm)	体積	形態上の特徴	手法上の特徴 (技法)	胎土	焼成色	調査状況		備考
										外面	内面	
1	甕	15.2	17.5	17.5	輪郭、長圆形 口縁わずかに外反	ヨコナダ、内面ヘラナダ タテヘケナダ	小砂多量	良好	赤褐色	赤褐色	カマド内	土師器
2	甕	14.3	16.5	16.5	輪郭、長圆形 口縁わずかに外反	ヨコナダ、ナメナダ ヨコ	小砂多量	良好	褐色	褐色	床	土師器
3	小形丸底	11.8	13.8	13.8	輪郭、周縁強くはる 口縁少るやかに外反	ヨコナダ	小 石	良好	暗褐色	褐色	床	土師器
4	甕	12.0	13.0	13.5	口縁直立、作り薄 堅厚堅厚、口縁	ヨコナダ、ハケナダ ナナメハケナダ	小石多量	良好	茶褐色	茶褐色	カマド焼	土師器
5	壺	5.3	14.2	13.5	半月状、口縁わずかに外反	ヨコナダ ヨコヘラみがき	密	良好	暗褐色	茶褐色	床	土師器
6	壺	5.0	13.3	14.2	直作り、口縁わずかに直立 肩部はり	ヨコナダ、ナダ、印文 ヨコヘラみがき	小 砂	良好	暗黒褐色	褐色	カマド焼 床	土師器
7	壺	5.0	14.5	14.7	口縁に後あり、器底部厚	ヨコヘラみがき、内面タテヘラ みがき、底断ヘラケアリ	小石多量	良好	暗黒褐色	褐色	床	土師器
8	鉢	13.4	12.6	12.6	口縁わずかに外反	ヨコ、ナメヘラみがき 回転ヘラケアリ、ナメ調整	小 砂	良好	茶褐色	茶褐色	カマド焼 床	土師器
9	蓋壺(身)				腹部一条のクビレ有 受け部小形		密	良好	灰色	灰色	床	須恵器

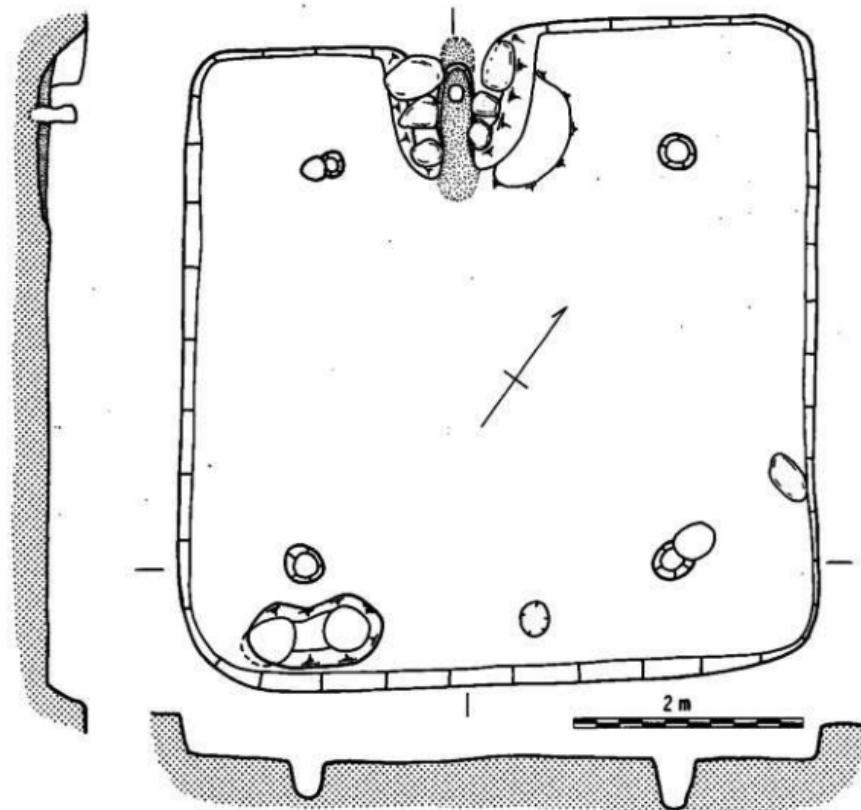


第12図 黒河内遺跡第4号住居跡出土土器、鉄製品、石製品実測図

5号住居跡（第13図）

遺構 4号住居跡の東側に発見された大形な住居跡で、南北 $5.70m \times 5.50m$ を計る方形の竪穴住居跡である。カマドは北側中央やや西寄りに位置し、石芯粘土製カマドであり比較的大形なものである。柱穴はそれぞれコーナー寄りに主柱穴が存在し、南壁の南コーナーに貯蔵穴が存在する。住居跡は砂層を掘り込んで構築されるものであり床面までの掘り込みは平均35cmを計る。床面は比較的良好であるが、各住居跡同様カマド周辺部が良く特にカマド前面はきわめて良好であった。

カマドは両袖に大形な河原石をカマド内側に向けて、やや傾斜した状態で立てその周囲を粘土で



第13図 黒河内遺跡第5号住居跡実測図

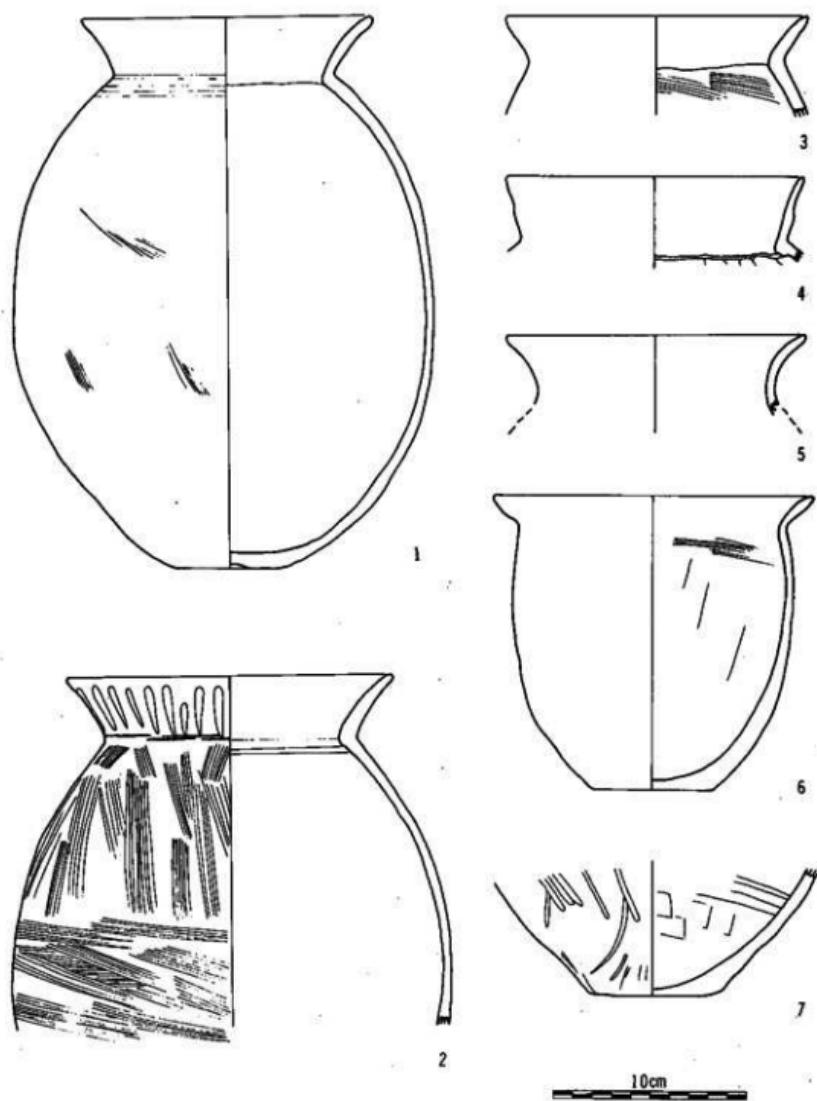
被覆するという構築状態であった。またカマド右袖の床面は若干高くなつており、この部分から大型な壺形土器の出土があつた。また右袖と壁に接する部分より土師器壺と須恵器壺などが出土している。またカマド内の支脚は床面をほぼ10cm掘り込んで埋め直立させてあつた。また両袖に使用されている石も同様10cm程を床面下に埋め込んで構築するものであり、きわめてていねいなものである。

遺物 土師器及び須恵器が出土している第14図、第15図に示すものがそれであり、第14図1～7、第15図1.2は壺形土器である。第14図1.2は比較的大形で長胴形を示し、頸部のクビレは強くクビレまた口縁部も強く外反する。1の底部は不整形な丸底状を示し、2は胴部以下を欠損するため不明であるが、おそらく1同様の形態を示すものであろう。また口縁部より頸部にむかいへらによる調整痕が認められ、胴部外面もハケによるみがきがかけられている。同図3～5は頸部以下を欠損するが、それぞれ頸部のクビレに特徴が認められる。6はカマド右袖上より発見されたものであり調査の過程では袖石に接し、胴部以下を粘土中に埋め込まれ直立していたものである。さほど大形なものではないが、口縁部が大きく開き長胴形を示すもので、底部は平底である。同図7は壺底部であり、第15図1とした壺形土器は胴部以上がカマド内部より、2としたものがカマド右袖に接する一段高い床面上より出土した。接合作業による観察では焼成、色調ともに同様でありおそらく一個体の土器と推定される。2の胴部より底部にかけては器面が剥落しているが、きわめて焼成度合は良好である。同図3は碗形土器とするより鉢形土器に近いものであろう。器外面には継のハケ調整痕が多く残り、内面は横ハケにより調整される。4は坏であり器外面はヘラみがきされ、内面は黒色処理されるものであり、底部を欠損する。また暗文が認められる。同図5は高环形土器の脚底部である。この高环は本遺跡唯一の出土である。1.7は丸底を有する小形の土器であり、6は器壁がきわめて厚い。7は底部を欠損する小形丸底状の土器であろう。8は鉢形土器であり器外面の一部は横へらによるみがきと、胴部下半分はハケによるみがきがかけられている。内面は、黒色処理されると同時に一面に暗文が認められる。同図9は須恵器の甌でありカマド右袖と壁に接する部分より出土したもので、きわめてその出来は優秀なものであるが、口縁端部のみ欠損するものである。頸部に波状文を認め、また胴部中央帯にもタタキ状の痕跡が認められる。器面は暗緑色系の自然釉が懸垂付着し、色調は暗青色を有する焼成良好な須恵器である。（第5表）

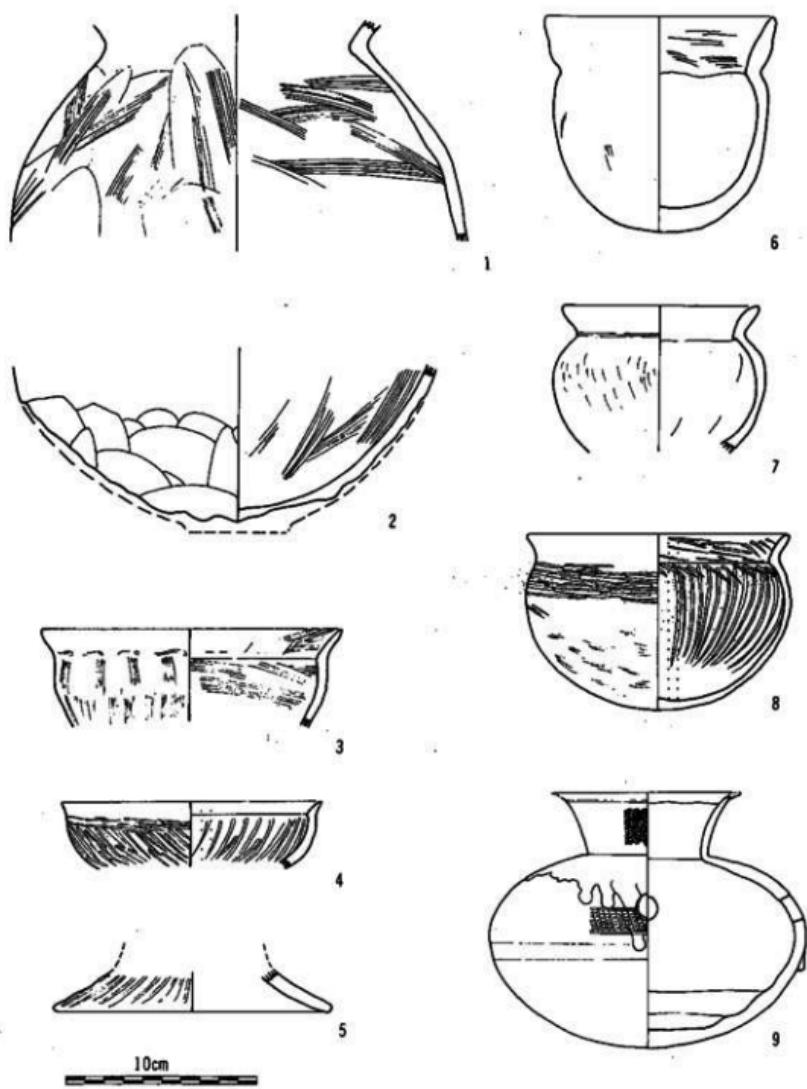
第5表 黑河内5号住居跡出土遺物一覧表 (第14回)

黑河内5号住(第15图)

機器番号	器種	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴(抜法)		胎土焼成	外観	内面	調査状況	出土種類	備考
				器高	口径						
1	壺			23.7	輪縁、頸部強くクビレ輪縁、器體全面削落	脚部へかけずり 内面ナメハゲ	密	黄褐色	黄褐色	カマド内	土師器
2	壺	15.7	欠	14.2	輪縁、器體全面削落	内面ハケナデ ヨコナデハケナデ タチハケナデ	密	黄褐色	黄褐色	カマド内	土師器
3	环	13.5		13.0	輪縁無地	ヨコナデナメヘラムガキ 内面黒色處理、暗文 タチヘラムガキ	小	黄褐色	黑色	床	土師器
4	高环			14.4	ラバ状	ヨコナデ	密	赤褐色	赤褐色	床	土師器
5	小形壺	11.0	丸底	11.8	丸底	輪縁、器體部厚く 口縁部立って	密	黄褐色	黑色	床	土師器
6	小形丸底	10.0	丸底	11.0	輪縁無地	ヨコナデ ヨコナデハケムガキ 内面黒色處理 ヨコナデラムガキ ハケナデ	小	黄褐色	黑色	床	土師器
7	鉢	9.0	丸底	13.5	丸底	輪縁無地	小	石	黑色	床	土師器
8	瓶	約13.3	約10.0	16.5	頭部強く外反 口縁部も外反	頭部強く外反 口縁部も外反	密	灰黑色	反黑色	カマド北	須電器
9	瓶					頭部強く外反 口縁部も外反					



第14図 黒河内遺跡第5号住居跡出土土器実測図



第15図 黒河内遺跡第5号住居跡出土土器実測図

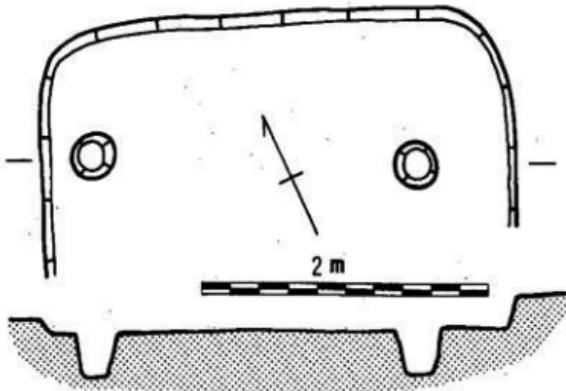
### 6号住居跡（第16図）

**遺構** 5号住居跡の南に発見されたが、用地外に約半分がかかり調査不能であった。東西壁長3.20mを計る小形な方形竪穴プランの住居跡である。北側の一部のみ調査ができたが、竪穴は砂層を掘り込んで構築されており、壁より床面までは約25cmの掘り込みが確認できた。柱穴は主柱穴2本を確認したが、カマド等の位置は不明である。出土遺物は西側の主柱穴をはさみ両側の床面上より出土したものである。床面は砂層のため良好とは言えない。

**遺物** 土師器壺形土器2点の出土である。第17図1、2に示す土器がそれで、同図1は胴部球形状をなす壺形土器で、底部を欠損する。2は長胴形の壺形土器でありかなり大形になるものと推定される。胴部以下を欠損するものであるが、両種ともにきわめて異なった形態を示し注目される。

第6表 黒河内第6号住居跡出土遺物一覧表（第17図）

遺物 番号	法 量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴 (技 法)	胎 土	燒成	色 調		出 土 状 態	種 類	備 考
	高 度	口徑	底徑					外 面	内 面			
1 壺	底22.0 残22.0	17.5	不	23.3	輪縁、頸部に後あり 口縁部 ゆるやかに外反 肩座球状	ナナメナデ ナナメヘラミガキ 内面ヨコヘラミガキ ナナメハラケズリ	小 砂	良好	黒褐色	赤褐色	床	土師器
2 壺	底15.5 残15.5	19.0	不	22.3	輪縁 口縁みじかく ゆるやかに外反 長胴形	ヨコナデ タテハケナデ	小石多量	良好	暗茶褐色	褐色	西床	土師器

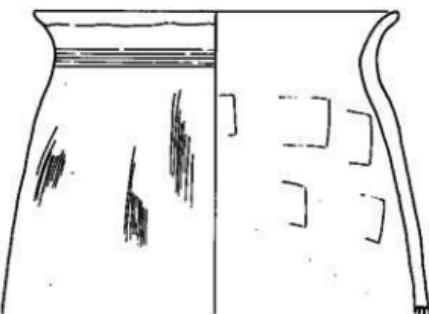
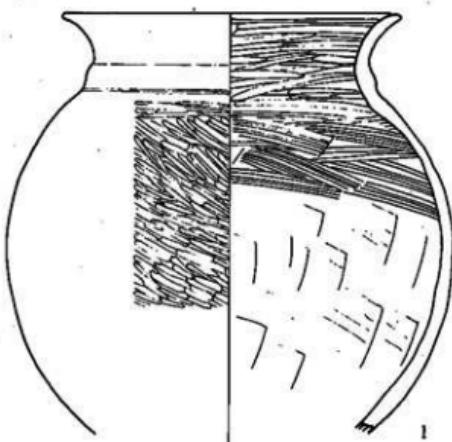


第16図 黒河内遺跡第6号住居跡実測図

### 7号住居跡（第18図）

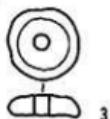
**遺構** 2号住居跡の西側に発見された住居跡であるが、西側約4mは後世の搅乱により壁及び床面の一部が破壊されていた。したがって東側約4mの調査に止まつた。住居跡は方形の堅穴プランを示すが、一辻3.90m程を有するものである。しかし北側及び南側壁は中途で確認できなくなるため、カマド及びその他の部分は不明である。柱穴は東側床面の2本の主柱穴及びその中間の壁寄りに存在する円形のピット1ヶ所が確認されたのみである。この住居跡も砂層を掘り込んで構築されているが、特にこの部分は砂層の堆積が他の地域と異なるものであり、床面の状態は特に悪い。出土遺物も数片の土師器甕破片と、石製品、鉄製品のみ出土したにすぎない。

**遺物** 土師器、石製品、鉄製品の出土がある。第17図3.4に示すものがそれである。同図3は滑石製の紡錘車であり、4は用途不明の板状鉄製品である。いずれも床面出土である。土師器甕破片が数点出土しているが、器形を知り得るにはいたらない。



### 8号住居跡（第19図）

**遺構** 7号住居跡の東側に近接して発見された住居跡であり、南北4.25m、東西4.45mを計る方形プランの堅穴住居跡である。カマドは北西壁ほぼ中央に位置する石芯粘土製カマドである。柱穴は各コーナー寄りに4本が存在している。壁高は床面より20cmを計り比較的浅いが、この住居跡上にはかつて車庫が建設されコンクリートが

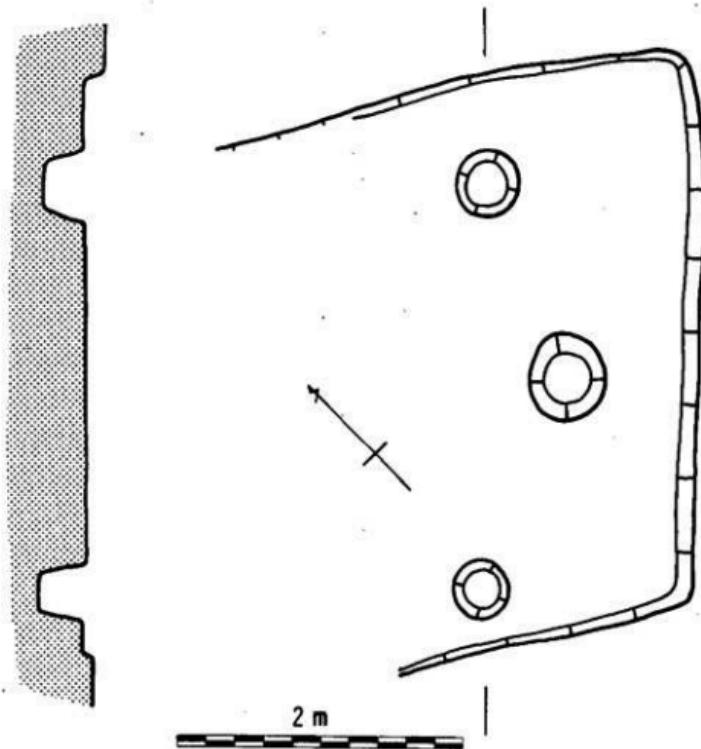


10 cm

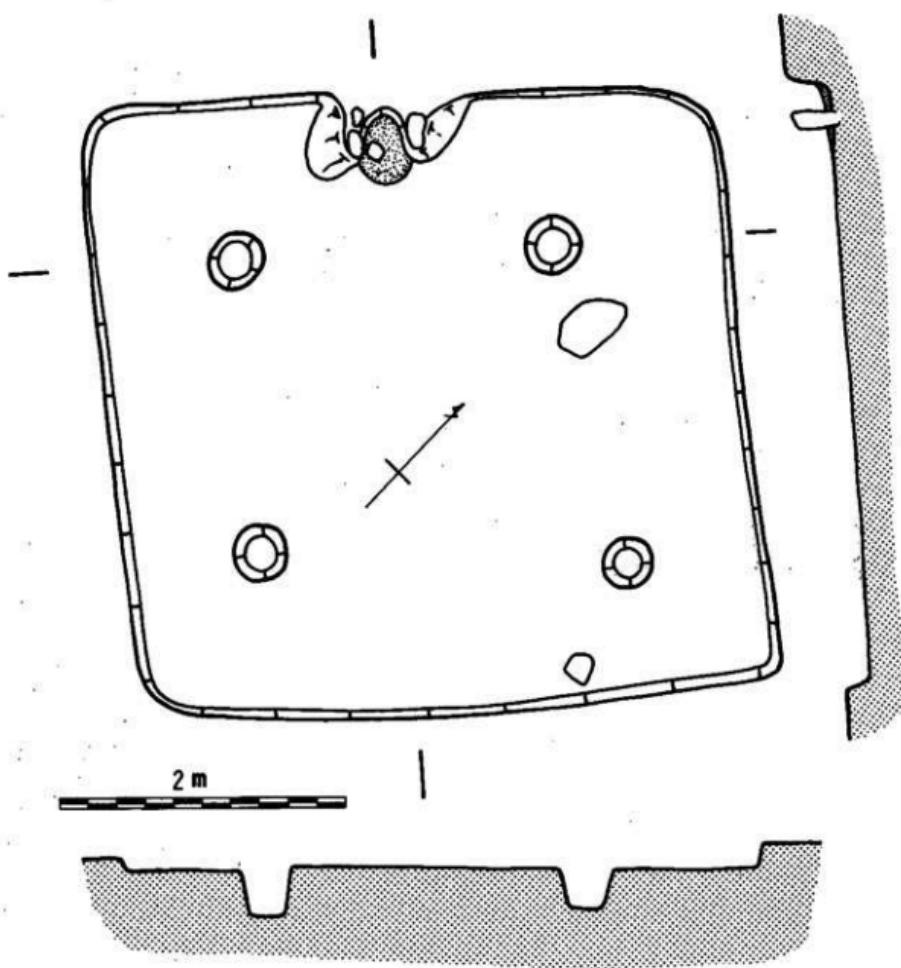
第17図 黒河内遺跡第6号住居跡出土土器実測図、  
第7号住居跡出土石製品、鉄製器実測図

厚くねられており、それを取り除いてからの調査であり、重機使用により住居跡確認面がわずかに掘り取られたため、壁高はさらに10~15cm上にのびると推定される。この住居跡部分は他の住居跡よりわずかに高い位置にあり、住居跡も褐色土を掘り込んで構築されている。そのため床面も全体的に良好であり、出土遺物も多量であった。

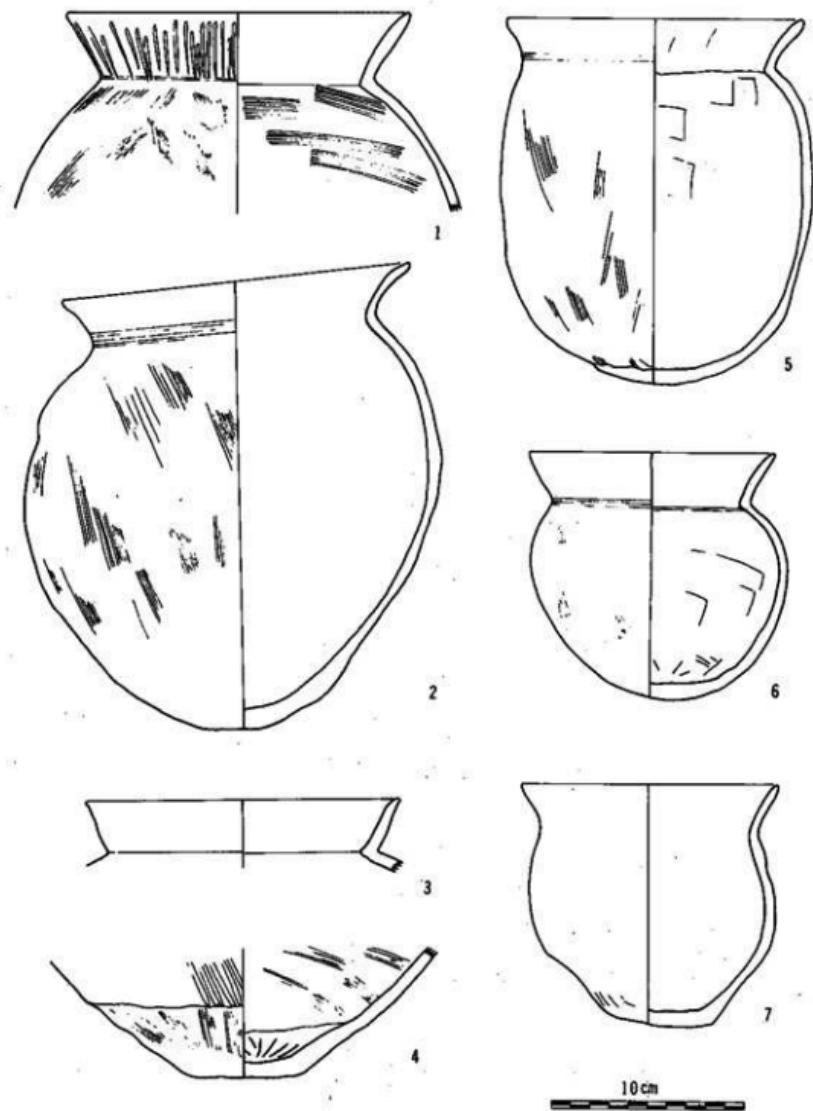
遺物 土師器のみであり、第20、21図に示すものがそれである。第20図は大形な壺形土器と小形壺形土器を図示した。また第21図に示すものは、小形壺形土器、壺、瓶などである。第20図の壺類は、胴部が球形状に近いもの、また長胴形を示すものなどが認められるが、底部は変形の丸底状を示すものが多い。全体に頸部のクビレは強く口縁部にむきい強く外反する。第21図1~24は小形な壺形土器であり胴部以下を欠損するものが多い。同図10、11は瓶であり、大形を有するものと、11のごとき小形で底部が多孔のものが存在する。同図5~9、12~15は壺でありその法量が様々で



第18図 黒河内遺跡第7号住居跡実測図



第19図 黒河内遺跡第8号住居跡実測図



第20図 黒河内遺跡第8号住居跡出土土器実測図

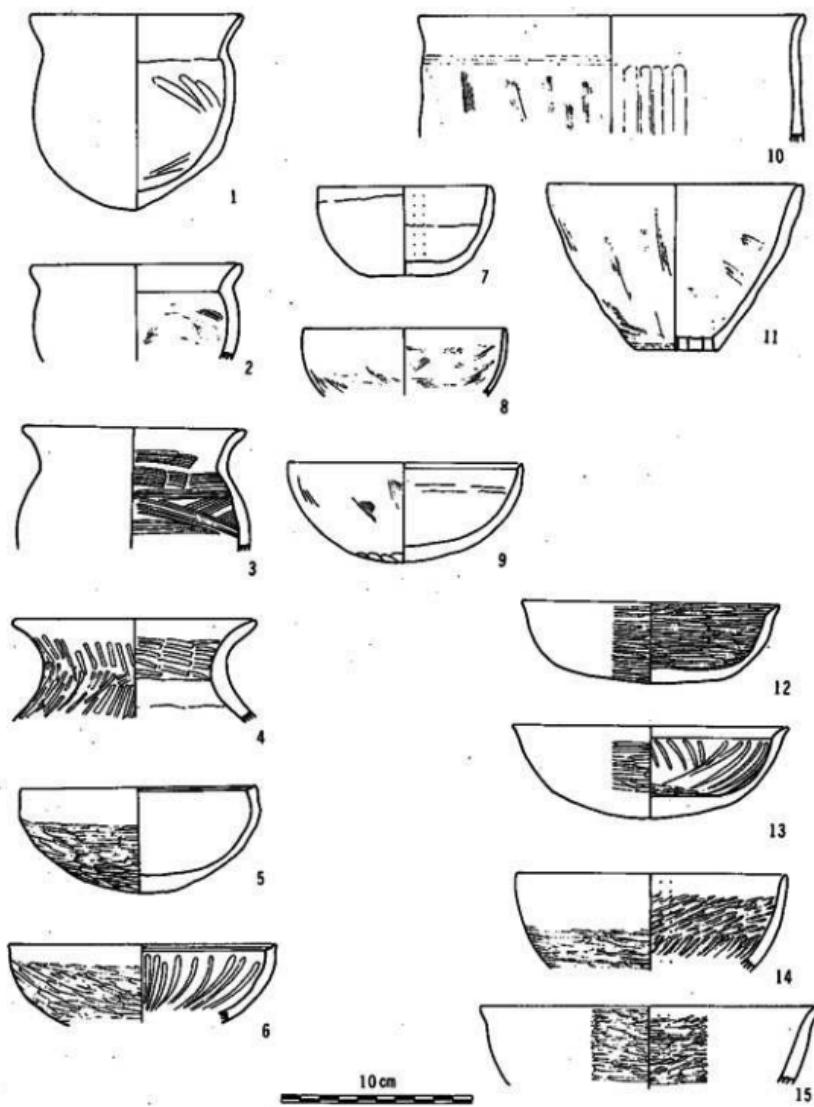
第7表 黑河内第8号住居跡出土遺物一覧表（第20図）

遺物 番号	器種	法量(cm)			形態上の特徴	手法上の特徴 (技 法)	胎 土	燒 成	色 調		出 土 状 態	種類	備 考	
		器高	口径	底径					外 面	内 面				
1	甕		17.8		23.8	頭部強くクビレ 口縁ゆるやかに外反 輪積、頭部球形に近い	ヨコナデ ナナメハケミガキ	小 砂	良好	暗褐色	褐色	床	土師器	
2	甕	23	18.2	丸底	21.5	輪積、頭部球形に近い 頭部クビレ強く口縁大きく外反	ヨコナデ ナナメハケミガキ	小 砂	良好	暗黒褐色	黒褐色	東へキ下床	土師器	
3	甕				16.3	輪積	ヨコナデ	小 石	良好	暗茶褐色	暗褐色	床	土師器	
4	甕				5.5	輪積	ナナメへらみがき 底部ハナダ	石英多量	良好	赤褐色	茶褐色	カマド北床	土師器	
5	甕		18.7	15.3	丸底	16.2	輪積、頭部強くクビレ 長胴型、口縁大きく外反 表面凸凹	ヨコナデ、ナナメハケナデ 内面へラ調整	小石多量	良好	暗黒褐色	暗褐色	床	土師器
6	甕		12.6	12.2	丸底	13.3	輪積、頭部球形 口縁強く外反	ヨコナデ ナナメハケアツブ	小 石	良好	暗褐色	黒褐色	カマド西	土師器
7	甕		12.5	13.3	丸底	12.7	輪積、口縁ゆるやかに外反 頭部ゆるやかに 底部丸底	頭部ヨコナデ 基盤あるれる	小砂多量	良好	茶褐色	茶褐色	北コーナー床	土師器

墨河內8号住居跡出土遺物一覽表（第21圖）

地物 番号	基 礎	法 量 (cm)			形 態 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴 (技 法)	始 土	焼 成	色 調		出 土 状 態	種 類	備 考
		高 度	口 徑	底 径					外 面	内 面			
1	小形甕	10.1	11.0	9.5	輪積、口縁や外反 網膜長脚部	器面あれ、内面コナデ ナメハラナデ	小石多量	良好	黄褐色	黄褐色	床	土師器	-再燃のうがい有
2	小形甕		11.0		輪積、口縁や外反 網膜球形	ヨコナデ、内面ハケナデ 器壁あれており不明	小 石	良好	暗茶褐色	黑褐色	床	土師器	
3	小形甕		11.5		口縁や外反 底部球状	ヨコナデ 内面ナメハケ	小 石	良好	茶褐色	暗褐色	床	土師器	
4	小形甕		12.6		輪積	ヨコナデ 内面ハケナデ	真 黒量	良好	茶褐色	褐色	床	土師器	
5	坏	5.5	12.3	丸底	半月状、口縁や内湾	ヨコナデ、内面ハケナデ ヨコハラニガキ	小 砂	良好	黄褐色	褐色	床	土師器	
6	坏		14.0	丸?	半月状、口縁後有	ヨコナデ、暗文有 ナメハラニガキ	小 砂	良好	赤褐色	赤褐色	床	土師器	
7	小形环	4.6	0.9	平底	輪積、底部平 口縁直立	ナメナメナデ、内面黑色處理	小 砂	良好	暗褐色	黑色	カマド床	土師器	
8	坏		10.5		半月状 薄作り	ヨコハラナデ	密				床	土師器	
9	坏	5.3	12.3	丸	半月状、底部ヘラケズリ 口縁や内湾	ナメハケナデ	密	良好	赤褐色	褐色	床	土師器	
10	瓶		20.2		筒形 口縁は直立	ヨコナデ、内面タテハラニガキ 外面部タラナデ	小石多量	良好	赤褐色	赤褐色	床	土師器	
11	瓶	8.6	13.4	平多孔	輪積、底部平。多孔	ハケナデ	小 砂	良好	暗褐色	茶褐色	床	土師器	
12	坏	4.3	13.5	平	底部平、口縁や外反 口縁後有	ヨコハラニガキ	小 砂	良好	赤褐色	茶褐色	床	土師器	
13	坏	4.8	14.5	丸	半月状 口縁や外反	ヨコナデ ヨコハラニガキ	小 砂	良好	暗褐色	暗褐色	床	土師器	
14	瓶		14.0		半月状 口縁直立に近い	ヨコナデ、内面黑色處理 ヨコハラニガキ	小 砂	良好	暗褐色	黑色	床	土師器	
15	瓶		17.7		半月状、口縁や外反 器壁部凹い	ヨコハラニガキ 内面黑色處理	密	良好	赤褐色	黑色	床	土師器	





第21図 黒河内遺跡第8号住居跡出土土器実測図

ある。坏類の多くは器壁外面は横ヘラによるみがきが認められ、14, 15は内面黒色処理されている。

また6, 13などは暗文が認められ、14などは底部内面のみ暗文が認められる。さらに坏内面にも横ヘラによるみがきを認めるものも多い。7~9は器壁外面にハケによる整形痕が認められ、7は特に小形であり輪積痕も認められる一方、内面も黒色処理されるものである。また成形時の不備が認められる小形坏である。

#### 9号住居跡

遺構 8号住居跡の南側に位置する住居跡であるが、大部分を倒溝工事、車庫建設時に破壊されたらしく、一部覆土の残存と、床面、柱穴の痕跡を認めたにすぎないが、住居跡の大部分は授産所用地に遺存するものと推定される。

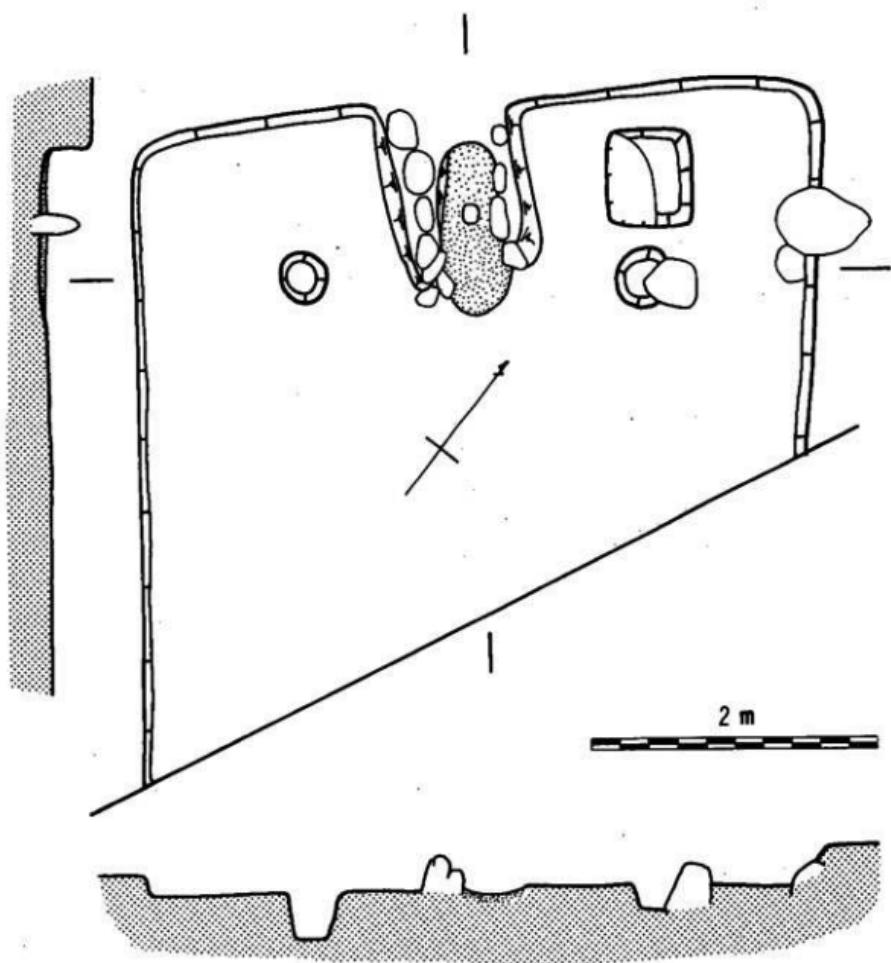
遺物 覆土中より土師器幾小破片を数点得るのみであった。

#### 10号住居跡（第22図）

遺構 5号住居跡の東側に発見されたもので、1/3が用地外に存在するため住居跡全体を検出することはできなかった。北壁一辺4.83mを計り、南壁は4.50mまで確認したがコーナーまでは検出できていない。カマドは北壁中央に石芯粘土製カマドを構築しており、きわめて大形である。両袖ともに人頭大の河原石をカマド内側にやや傾斜させて配置しその上部を粘土によって被覆している。カマド中央には支脚が存在し、焼土も約5cm程が堆積していた。住居跡の掘り込みは床面まで深い所で30cm、浅い所で15cmを計る。柱穴はカマドをはさみ両コーナー寄りに2本が確認され、カマド右側、柱穴に近接し方形の貯蔵穴が認められる。床面は比較的良好であった。この住居跡も砂層を掘り込んで構築されるものであった。

遺物 土師器及び須恵器が出土している。第23図1~8に図示するものがそれであり、同図1~3、6は壘形土器である。同図1は大形で長胴形を示し、2は胴部以下を欠損するが、球形胴になると思われる。6、7は球形胴に近くいずれも口縁部の立ち上がりはゆるやかなもので、頸部のクビレも弱い。1は強いクビレを強く外反する口縁部であり底部は不整形で小形な平底状を示す。2は口縁端部に特徴が認められ水平であるが、頸部のクビレは強い。内面は輪積痕と指頭痕が明瞭に認めることができる。同図4、5は土師器坏であり、半球状をなし4は内面黒色処理されたものである。

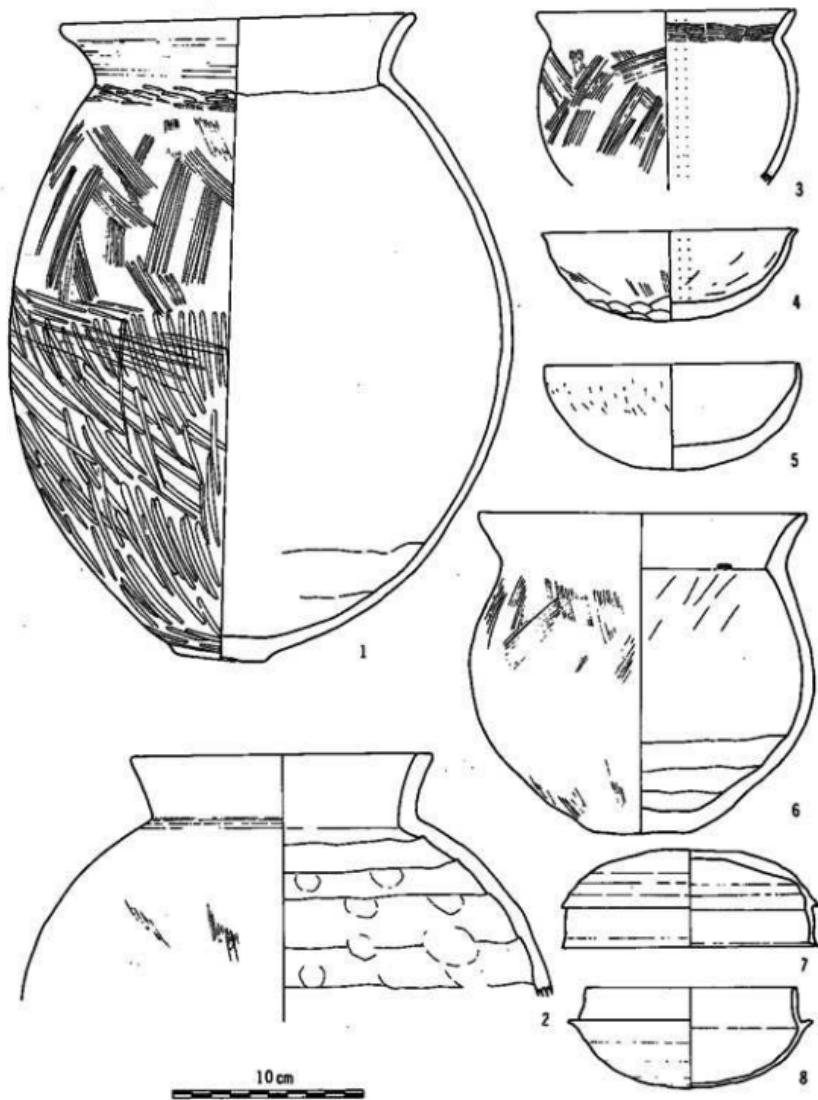
同図7、8は須恵器蓋坏の蓋と身部であり、特に8は内面の底部に同心同文の型押し痕が明瞭に認められるものであり、生産地の特定が可能な須恵器である。（第8表）



第22図 黒河内遺跡第10号住居跡実測図

第8表 黒河内10号住居跡出土遺物一覽表 (第23回)

遺物番号	器種	注量 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴 (技法)	土燒成	色調		出土状況	備考
		高さ	口径	底径				外面	内面		
1	壺	32.8	18.6	4.8	26.4 輪郭長脚形 底部小さな平底 側部くびれ強く口縁ゆるや かに外反	ヨコナデ、ナナメヘラムがき ハケナデ	小 砂	良好	暗茶褐色	カマド北床	土師器
2	壺	15.6			27.8 輪郭輪部垂直 輪郭、圓錐形 口縁ゆるくくびれ 側部やや外反	ヨコナデ、 ハケナデ、 内面指頭彫整	石英多量 小 砂	良好	黄色	カマド北床	土師器
3	小形壺	13.4			13.7 輪郭、圓錐形 口縁やや外反	ヨコナデ、 内面黒色處理 ハケナデ、 底部へラギナデ	小 砂	良好	黑色	床	土師器
4	壺	4.8	13.5	丸	12.6 半月状 口縁直立、 器體部薄い	ヨコナデ、 ハケナデ	小 砂	良好	茶褐色	床	土師器
5	壺	5.5	13.4	丸	13.4 輪郭、 口縁直立、 器體部薄い	ヨコナデ、 ハケナデ	小 砂	良好	黄色	床	土師器
6	壺	16.8	17.2	0.5	18.0 輪郭、 口縁やや厚形 底部へうけたて	ヨコナデ、 ハケナデ、 口縁強く やかに外反	小 砂	良好	暗褐色	カマド前床	土師器
7	壺(蓋)	0.5	13.4	丸	13.0 半月状 天井部円形状 口縁垂直	ヨコナデ、 ハケナデ、 内面底部同 心円文 ナデ調整	密 合	良好	暗青灰色	カマド北床	須恵器
8	壺(蓋)	5.2	11.1	丸	12.0 口縁やや内凹 受筋やや外反	ヨコナデ、 ハケナデ、 内面底部同 心円文 ナデ調整、 回転台	密 合	良好	暗灰色	南 床	須恵器



第23図 黒河内遺跡第10号住居跡出土土器実測図

### 11号住居跡

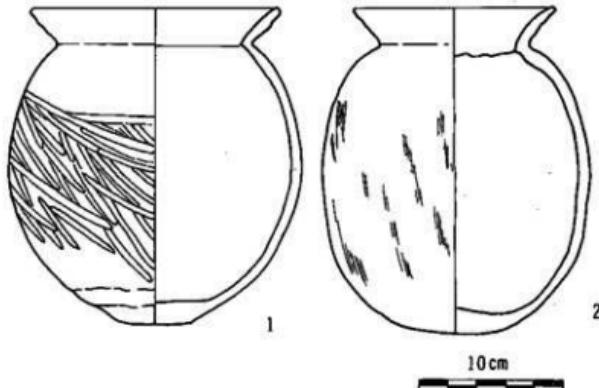
**遺構** 未確認であるが、以前地主により變形土器 2 点が発見されている。また出土状態もきわめて接近して出土しており、両種ともに完形品でおそらく住居跡内部からの出土と推定されるため一応11号住居跡として処理しておくことにする。発掘調査された住居跡分布図にもその地点を示したが、その位置はきわめて適当な位置にある。

**遺物** 土師器變形土器でありそれぞれ特徴的な形態を示す。第24図に示す土器がそれであるが、同図1はやや長胴形を示すものの頸部はきわめてクビレが強く口縁部も比較的強く外反している。

胸部器外面はナナメヘラによるみがきが行われ、底部は変形した丸底であり輪積痕が明瞭に認められる。同図2は長胴形を示す丸底の壺であり頸部のクビレも強い。口縁部は大きく外反しており胴部器面はハケによる調整がなされている。(第9表)

第9表 黒河内第11号住居跡出土遺物一覧表 (第24図)

遺物 番号	器種	法 量 (cm)				形態上の特徴	手法上の特徴 (技 法)	胎 土	焼成	色 調		出 土 状 態	種 類	備 考
		器高	口径	底径	体径					外面	内面			
1	壺	21.5	17.0	丸5.0	20.5	輪積 くびれ強く口縁強く外反 輪積痕に近い 底部小さな平底	ヨコナデ ナナメへラみがき	小石	良好	茶褐色	暗褐色		土師器	
2	壺	22.3	13.8	丸	18.5	輪積、底部丸底 くびれ強い 口縁部強く外反 輪積痕形	ヨコナデ タテハケナデ	小石	良好	茶褐色	褐色		土師器	



第24図 黒河内遺跡第11号住居跡出土土器実測図

## 2 溝 状 遺 構

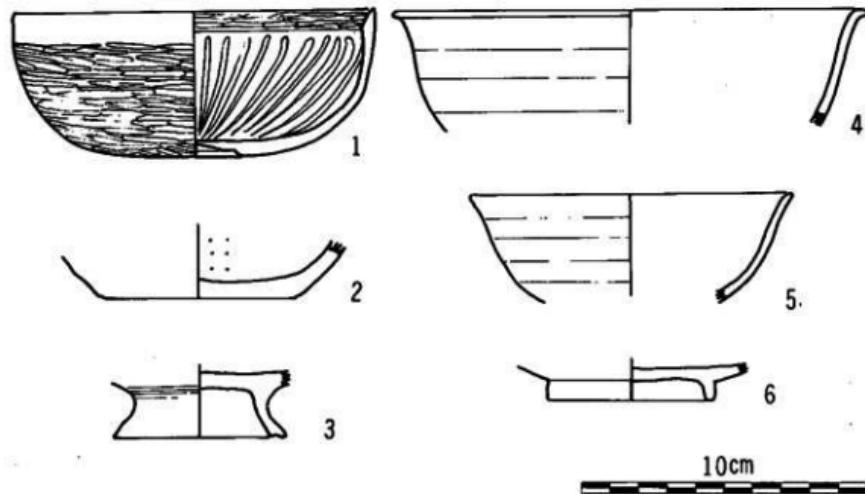
### 溝No.1

調査区の南側に存在し北西より東南方向に走る幅50cm、深さ10cm程の溝が存在する。この溝跡は住居跡の覆土上部に確認されたものであり、住居跡廃滅後のものであり出土遺物もない。

### 溝No.2

調査区東南隅に確認されたものでNo.1の溝跡より古いものである。溝跡はほぼ東西方向に走るもので、幅60cm、深さ20cmほどのもので明らかに水が流れていたものであり、底面には砂及び砂利、所々に河原石の存在が認められた。底面に認められる凹地より砂利にまじりわずかな出土遺物が認められた。

遺物 土器器（古墳時代）（平安時代）灰釉陶器、須恵器、陶器等様々であり、第25図に示すものがそれである。同図1は古墳時代の土器器環であり底部に大きな凹が認められる。底部より口縁部にいたる立ち上がりはきわめて強く、器壁外面は横ヘラみがきが認められ、内面には暗文が認められる。2は内面黒色処理された环であり、3は高台を有する环底部である。4は灰釉陶器の碗であり底部を欠損している。全器面にあわい緑色釉が認められる。5は須恵器であり底部を欠損する。以上2～5に示す土器類は平安時代の所産と考えられ、6は白色釉がかかる底部であり高台を有するものである。おそらく平安時代以後のものであろう。その他この溝内からは古墳時代および



第25図 黒河内遺跡溝No.2出土土器実測図

平安時代の土器小破片が多く出土しているためこの溝は古墳時代より平安時代にかけてのものであろう。

### 3 石敷遺構

この遺構は1号住居跡と2号住居跡との間に存在し、3号住居跡西側壁までの間に存在するものである。この石敷は人頭大より拳大の河原石敷でありそれぞれの住居跡壁面確認の段階で注意されたもので砂層中に存在する。またこの範囲のみに確認されるもので、特に2号住居跡の北側コーナーの内部に一部が存在すること、2号住居跡内の遺物はこの石の上部に多く認められること、さらに2号住居跡は多くの石を取りのぞくことなく掘り込まれ住居を構築している事実などを考えると、この石敷は自然のものとも推定できる。砂層中に存在する河原石の堆積部分の上面であろうか。

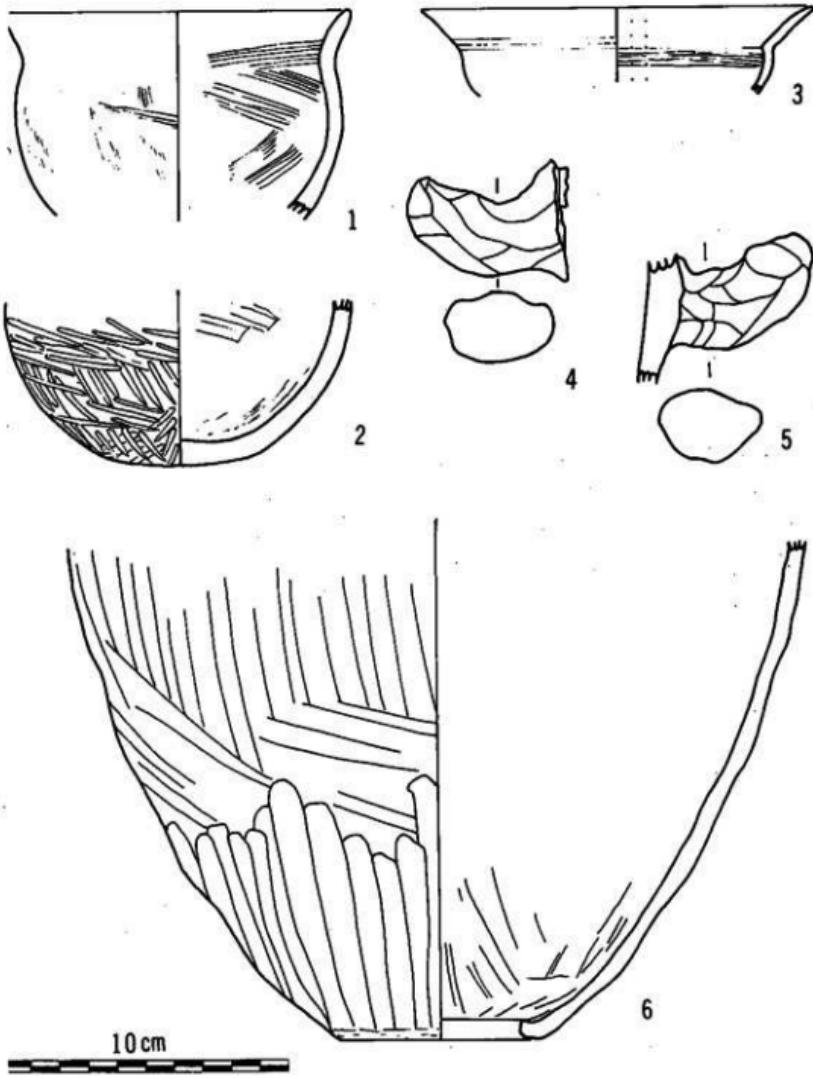
この部分からの出土遺物は発見されていない。

### 4 その他の遺物

砂層上面にわずかな褐色土の堆積が存在し、それより出土した遺物である。特に1号住居跡、3号住居跡、10号住居跡を結ぶほぼ南北線より東側にあたる居住地域よりはなれた部分一帯からの出土である。第26図に示す土器類がそれらであるが、1、2は丸底状を示す小形の變形土器であり、いずれも底部や胴部以上を欠損するものである。3は器壁の薄い鉢状の形態を示す土器であり、内面は黒色処理されており底部を欠損している。4～6は同一個体の瓶と把手である。1号住居跡と3号住居跡の中間部で発見されている。本遺跡でいくつかの瓶が出土しているが、把手の確認されたものは本例のみであり、単孔を有する大形の瓶である。

第10表 黒河内遺跡褐色土出土遺物一覧表 (第26図)

遺物番号	器種	法寸 (cm)			形態上の特徴	手法上の特徴 (技 法)	胎土	焼成	色調		出土状態	種類	備考
		高	口径	底径					外 面	内 面			
1	小形甌	11.8		11.5	輪縁、脚部球状 口沿ゆるやかに外反	ヨコナデ・ タテ、ナナメハケナデ	小 砂	良好	赤褐色	暗茶褐色	褐色土	土師器	
2	小形甌			15.0	輪縁、脚部球形 底部丸底	ナナメヘラムガキ	小 石	良好	暗黒褐色	黒褐色	褐色土	土師器	
3	鉢	13.8		11.0	輪縁、口沿大きく外反 脚部半月状	ヨコナデ 内面黒色処理 脚部みがき	密	良好	赤褐色	黑色	褐色土	土師器	
4	把手				角の状	手こね及び折彫整形	小 石	良好	暗茶褐色		褐色土	土師器	
5	把手				角の状		小 石	良好	暗茶褐色		褐色土	土師器	
6	瓶			25.8	輪縁、脚部長脚形 底部凸出孔	タテ+ナナメヘラムガキ 底部ヘラケズリ剥離	小石多量	良好	暗茶褐色	茶褐色	褐色土	土師器	



第26図 黒河内遺跡褐色土出土土器実測図

## V 調査のまとめ

### 1 集落のあり方

黒河内遺跡はほぼ南北に傾斜する現地形を有しているが、発掘調査により堆積土の除去後の地形は複雑である。まず遺跡周辺全体より多量の砂層が認められ、この堆積は地層調査により何回となく繰りかえされた状態を把握することができた。それは砂層中に遺存する黒色土の存在が少なくとも三層が認められ、きわめて多くの砂がこの黒色土をはさんで存在する事実は、松川による大氾濫があり古墳時代以前には人間の生活の場としては適しなかったものであろう。古墳時代後半期になりようやく黒河内遺跡周辺は松川の河床より上位に発達したものであり、わずかな微高地が存在したものであろう。それは黒河内遺跡より南側の現国鉄飯田線が通過する地帯は、現状地形でもわずかに低くなっている、おそらく住居跡群が発見された地帯は最も高所であった可能性が充分想定できる。また調査範囲内においても住居跡群の分布はほぼ南北方向に存在し、東側一帯はわずかずつ低地帯となり、他の遺構も発見することはできなかった。住居跡群は造構配置図に示すごとき状態であり、住居跡もすべて単独で発見されている。そのため集落は南北に発達したわずかな微高地を利用した細長い集落であった可能性が推定できるのである。調査区に接して存在する町授産所敷地内にも多くの住居跡の存在が推定されるが、調査されないまま建造物が建てられ残念である。今回の調査においては、わずかな調査範囲であり集落全体を把握するまでには至らないが、黒河内遺跡はさらに南方方向に居住地域が存在するものであろう。また集落を中心両側に存在する凹地帯は、生活基盤となる重要な地域であり、さらにこの時期における墳墓地帯は、集落の存在する低地より上位段丘の先端にいくつかの古墳が存在し、そのあり方が注目される。

### 2 住居跡と土器様相

本遺跡で発見された住居跡は大小の差こそあれ、すべて単独に存在するものであり、住居跡内より出土した土器類はきわめて良好な資料と言える。住居跡はカマドの位置に相違が認められるが、これによって土器の相違は認められないし時間的相違も認ることはできない。各住居跡とともに多くの土器類が出土しているが、特筆されるべきは高壺形土器を保有する住居跡が認められない事実であり、ただ5号住居跡の覆土中より脚部底縁の小破片が一点のみ確認されたに止まる。当町にも山岸遺跡、天伯B遺跡など古墳時代の集落跡が確認されているが、いずれの遺跡においても各住居跡からは高壺を保有する住居跡が多く認められている。特に天伯B遺跡における集落としての高壺の保有率はおどろくほどの高い比率を示すのに対し、黒河内遺跡における調査では天伯B遺跡、山岸遺跡に比して10棟の住居跡が発見されたものの高壺を保有する住居跡は、5号住居跡のみであった。それも覆土中より発見されたきわめて小破片のみであり、同時代の集落として高壺の保有率が

きわめて低く、どのような性格を有するものか限定された範囲内の調査では不明である。また石製模造品を保有する住居跡も認められない。

また各住居跡ともに甕、鉢、壺などを有し、櫃を保有する場合もある。これに対し須恵器を認められる住居跡は3号、4号、5号、10号と4棟が保有しているのみであり、須恵器も蓋壺のどちらかと甕など特種な場合がある。いずれも欠損品であるが、当時としては貴重品として取りあつかわれたことであろう。須恵器類を保有する住居跡のあり方も、限定された範囲内からでは集落全体としてとらえることが不可能であるため断言できないが、集落全体が確認されている場合は、きわめて注目される結果が得られそうである。黒河内遺跡の住居跡はすべて単独に分布するものであり、各住居跡出土の土器類は他の遺構より混入する土器類がなく、住居跡個々の保有する器種はすべて一括資料としてその資料価値は大と言えよう。

各住居跡の確実な一括資料を見てみると、大形な變形土器と小形變形土器が認められ、變形土器にあっては1号、2号、8号住居跡に認められるのみである。その他器體をヘラ磨きされた壺は、法量に大きな差こそあるが多くの場合必ず保有している。特に注目されるのが變形土器に、胴部が球状に近いものと、長胴形を示すものが共に認められる事実である。これは当町内に存在する山岸遺跡や天伯B遺跡においても同様であり、これら二遺跡においては住居跡の切合関係よりそれぞれの出土土器による比較からは、その土器様相に若干の相違が認められわずかな時間的経過を考慮する必要が認められた。黒河内遺跡の場合は、住居跡による切合関係ではなくそれぞれの土器様相から古墳時代後半鬼高期の所産としておきたい。須恵器類にあっては、数量的に少ないがきわめて高度な製作技術が認められる。主に蓋壺の蓋部と身部が壺類では認められるが、特に10号住居跡出土の身部底面には同心円文の當て道異痕が認められる。また5号住居跡より出土した甕は、比較的小形なものであり、これと同種と思われるものが天伯B遺跡や山岸遺跡からも出土している。これらはともに良質なものであり、信州では生産されていないものであり、他地域より運ばれて来たものである。黒河内遺跡出土の甕は、口縁先端部を欠損しているが、実測図に示した形態より若干外開きになると思われる。頭部の発達は短く比較的古い段階の須恵器と思われる。

### 3 黒町の古墳と集落の関係

黒町内には14ヶ所の古墳が点在する。それらはすべて段丘先端部に構築される小規模な円墳が多く、出土品等も不明なものが多い。これらの分布は北方の切石地区に点在する一群、また伊賀良西の原より続く一色神社の位置する段丘先端部に点在する一群、さらに矢高神社上段に点在する一群などに分けることが可能である。

これに対し現在までに調査された古墳時代の集落跡は、切石の山岸遺跡及び天伯B遺跡、中平地区には今回調査した黒河内遺跡などが存在する。その他未だ調査の実施をみないが、上山地区には日向田遺跡、柳添遺跡などが存在し、調査によってはかなり大規模な集落跡が発見される可能性が

認められる地域である。これらの遺跡はすべて松川の中位段丘及び下位段丘であり、上段の一色や名古熊地城からは未だ当代の遺跡は確認されていない。切石地城には松川の河岸段丘の先端にそって、天伯1、2号墳、桜瀬古墳、切石古墳などが点々と位置しており、この地帯においては同一面の段丘に山岸遺跡、天伯B遺跡などの大集落跡が発見されており、古墳と集落とはほぼ同時期に属するものである。また黒河内遺跡や柳添遺跡と関連する古墳にカヤガキ古墳、物見塚古墳などがあり、日向田遺跡などと関連が推定されるものに宮の原古墳などがある。これらはともに集落と有機的関連性が充分考えられるものであり、集落とのかかわりを大いに注目したい。当町内における古墳時代の集落は調査の実施をみた三遺跡と、さらに数ヶ所の遺跡が確認されており、古墳時代におけるこの地域の開発は大いに発展していった事実を認識することができる。古墳それ事体はきわめて小規模であるにもかかわらず、集落の規模はきわめて大きく、山岸、天伯B両遺跡などは天竜川流域においても注目されるものである。しかし生産基盤となりうる地域は限定されたものであるため、その発展にも限度があり、古墳築造にもその影響は大きく関連したものと考えられよう。竜丘地帯や上郷、松尾、座光寺地帯に存在する大規模墳墓を構築する発展的集団と大いに関連性をもちつつ当町内の一つの地域のまとまりとして位置づいていたと推定されようが、大規模集団の中に隸属されるようになっていったものであろう。現在大規模集落は鼎町に集中しているが、今後の調査によってはそれぞれの地域に大集落跡の発見が期待される。特に群集墳と集落との関係については、今後より注目される結果が得られるものであろう。

#### 4 黒河内遺跡出土の須恵器について

本遺跡出土の須恵器類については、たまたま県埋蔵文化財センターの調査研究員小平和夫氏が所用により奈良に出向く計画を聞きおよび、出土須恵器類特に第5号住居跡と第10号住居跡より発見されたものを持参していただいた。それはいずれの窯業生産地によって焼成されたものか、また器物の様相から須恵器編年ではどの位置におかれるものか明確に知りたかったからである。資料的には少量であるが、同町内にも本遺跡と同時期に比定される天伯B遺跡が調査されており、ほぼ同様な須恵器類が出土しているため、本遺跡出土の須恵器類のご教示を得られれば、伊那谷全体における古墳時代須恵器の位置付けも、かなり正確なものとなり、その資料的価値は大と考えたからである。

出土須恵器に対しては、大谷女子大学教授中村浩氏のご教示を得られ、小平氏より同教授のコメントをいただいた。その結果については以下にご報告しておく。

本遺跡第5号住居跡出土の器については、体部が比較的部厚く作られており、胎土中に鉄分が多く含まれているためか重量がある。そのため大阪府堺市陶器山附近を中心とする陶邑古窯生産品ではないような感じが見受けられる。また胴部に一周する刺突文はI型式においては比較的新しい時期に比定される可能性が強い。おそらくI型式4段階か、I型式3段階の新しい時期に位置付けられるものと考えられる。また同住居跡出土蓋坏、身部については陶邑古窯生産品ではないであろ

うとのご教示を得、I型式4段階の古式な方に位置付けられるとされた。

第10号住居跡出土の蓋坏、蓋については陶邑古窯生産品の可能性が大とされ、I型式4段階に位置付ける事が可能とされた。また身部については、陶邑古窯生産品とは考えられないようである。

しかし型式及び段階においては、I型式4～5段階に位置するものとされたが、坏身部内底部に明瞭に認められるスタンプ痕は、陶邑古窯生産品中にはII型式1～2段階にのみ認める事ができるものであるが、黒河内遺跡10号住居跡出土例のごとくスタンプを重複して押した例は陶邑古窯生産品中には認められていないようである。したがって陶邑古窯編年にあてはめるとTK23～47の範囲内に位置付けられるもので、本遺跡より出土した須恵器の様相からおよそ5世紀末～6世紀初頭ころにその所産年代を求める事ができるようである。

いずれにせよ当町内の山岸遺跡や天伯B遺跡からも古い様相を示す須恵器が出土しており、黒河内遺跡出土須恵器にあっては、陶邑古窯生産品としては認められなく、焼成器物の生産地は不明であるが、土師器類の様相も関東地方や、北信地方との比較からも若干異なるものであり、南信地方とより隣接する濃尾地方との関係が深いものと推定されるため、当地方の古墳時代須恵器類もそれらの地方焼成品と強い関連があるものと想定しておきたい。

最後に大谷女子大学の中村浩氏及び長野県埋蔵文化財センター小平和夫氏に対し厚くお礼申し上げたい。



第27図 黒河内遺跡10号住居跡出土  
蓋坏身内面のスタンプ痕（実大）

西暦	A.D. 450	500						
田辺編年	I期					II期		.....
	TK73型式 (TK73号蓋型式)	TK216型式	TK208型式	TK23型式	TK47型式	MT15	TK10.....	
I型式								
陶邑編年 (中村編年)	1段階 (第1段階)	2段階	3段階	4段階	5段階	1段階	2段階	.....

初期須恵器編年対照表

(備考) 田辺氏は、TK216型式までを初期須恵器とされている。中村はI型式3段階までを初期須恵器とする。中村編年で黒網点部分は、両段階が併存することを示す。

<参考資料「日本陶磁の源流」1984年 柏書房ヨリ>

---

---

## 鼎町黒河内遺跡発掘調査報告書

昭和59年11月発行

発 行 長野県下伊那郡鼎町教育委員会

中部電力株式会社飯田支社

印 刷 株式会社 興文社  
飯田市馬場町2 TEL 0265-22-2107

---



▲遺跡近景 調査前の状況



▲小学生の学習

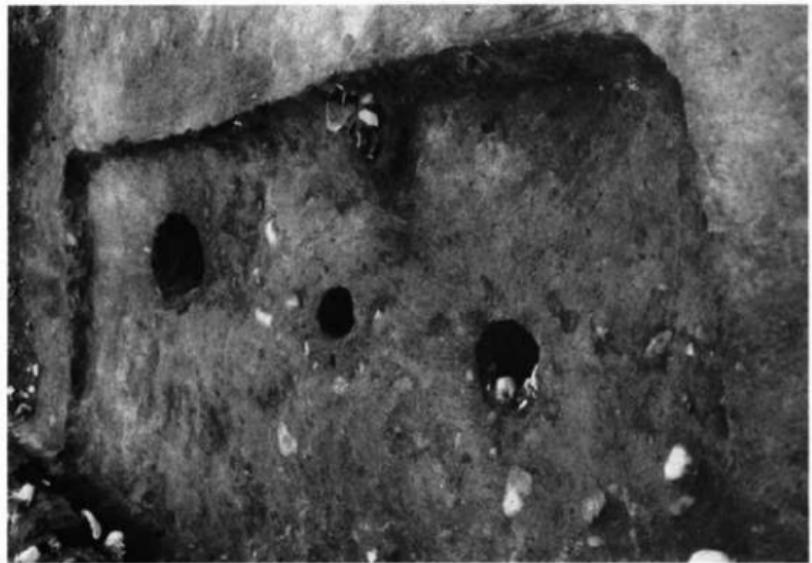


▲住居跡の分布状況 1号～3号

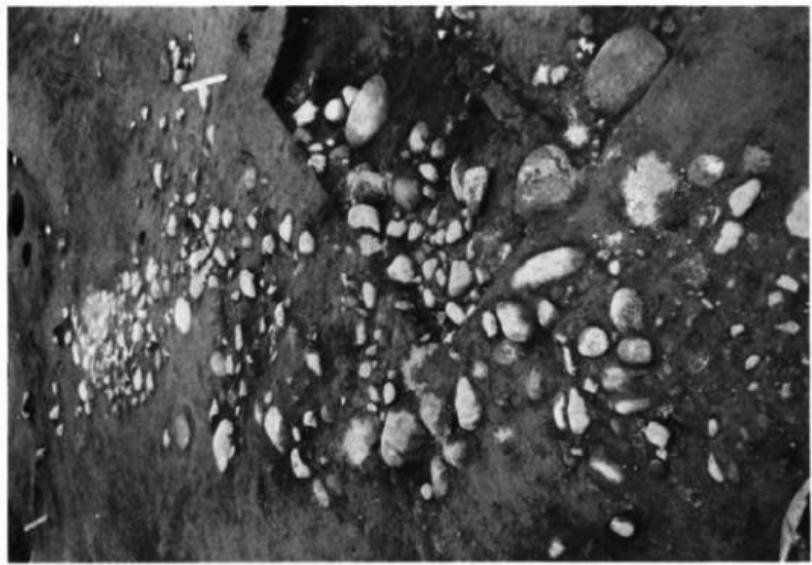


▲住居跡の分布状況 3号～6号

▲ 1号住居跡



▲ 石敷状遺構





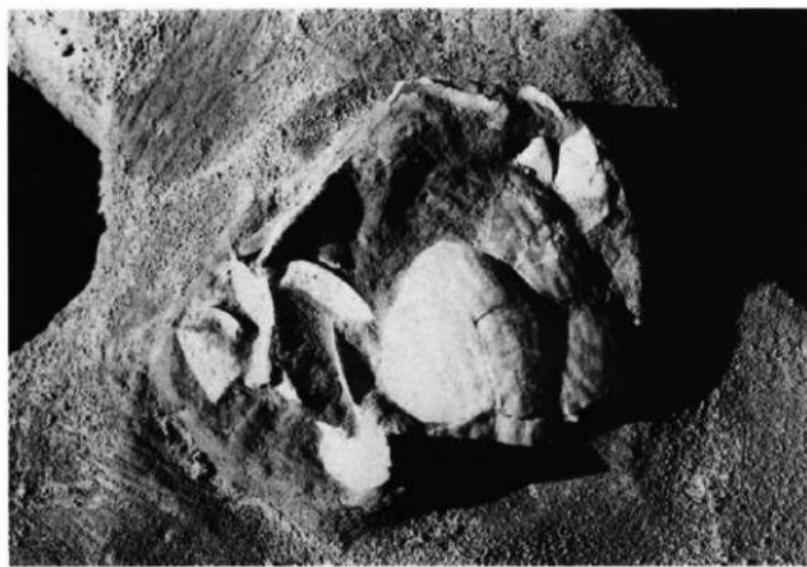
▲ 2号住居跡 全景



▲ 2号住居跡 カマド



▲ 2号住居跡 遺物出土状態



▲ 2号住居跡 麦出土状態



▲ 3号住居跡 全景



▲ 3号住居跡 遺物出土状態



▲ 3号住居跡 カマド及びヒョウ出土状態



▲ 4号住居跡 全景



▲ 5号住居跡 全景



▲ 5号住居跡 カマド



▲ 5号住居跡 カマド及び砾出土状態



▲ 5号住居跡 瓦出土状態



▲ 6号住居跡 全景



▲ 7号住居跡 全景



▲ 8号住居跡 全景



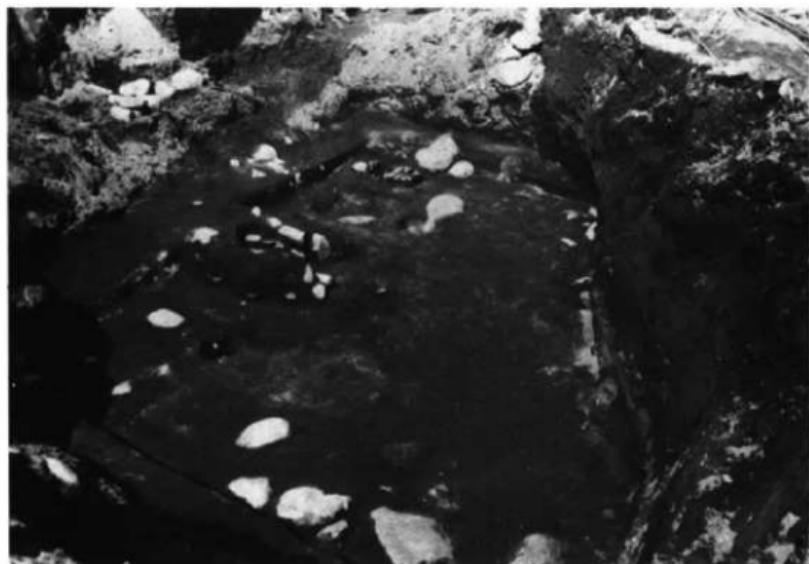
▲ 8号住居跡 カマド



▲8号住居跡 遺物出土状態



▲8号住居跡 遺物出土状態



▲ 10号住居跡 全景



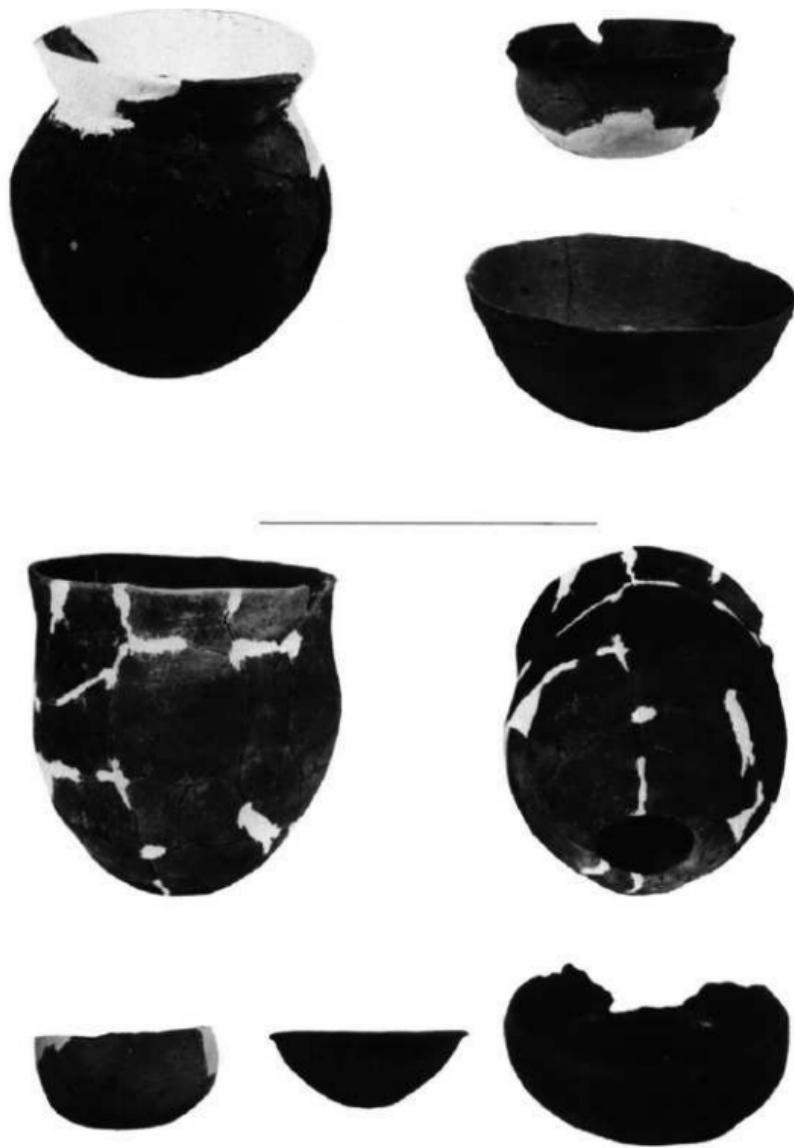
▲ 10号住居跡 カマド



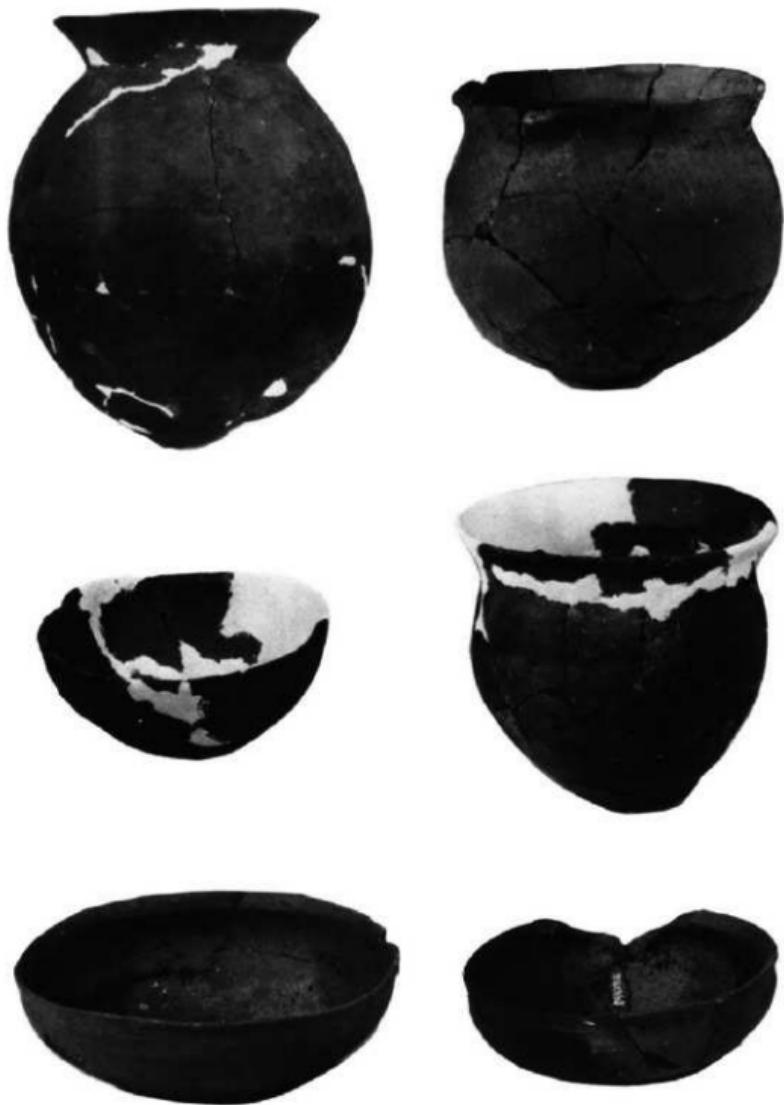
▲ 10号住居跡 須恵器出土状態



▲ 10号住居跡 壺出土状態



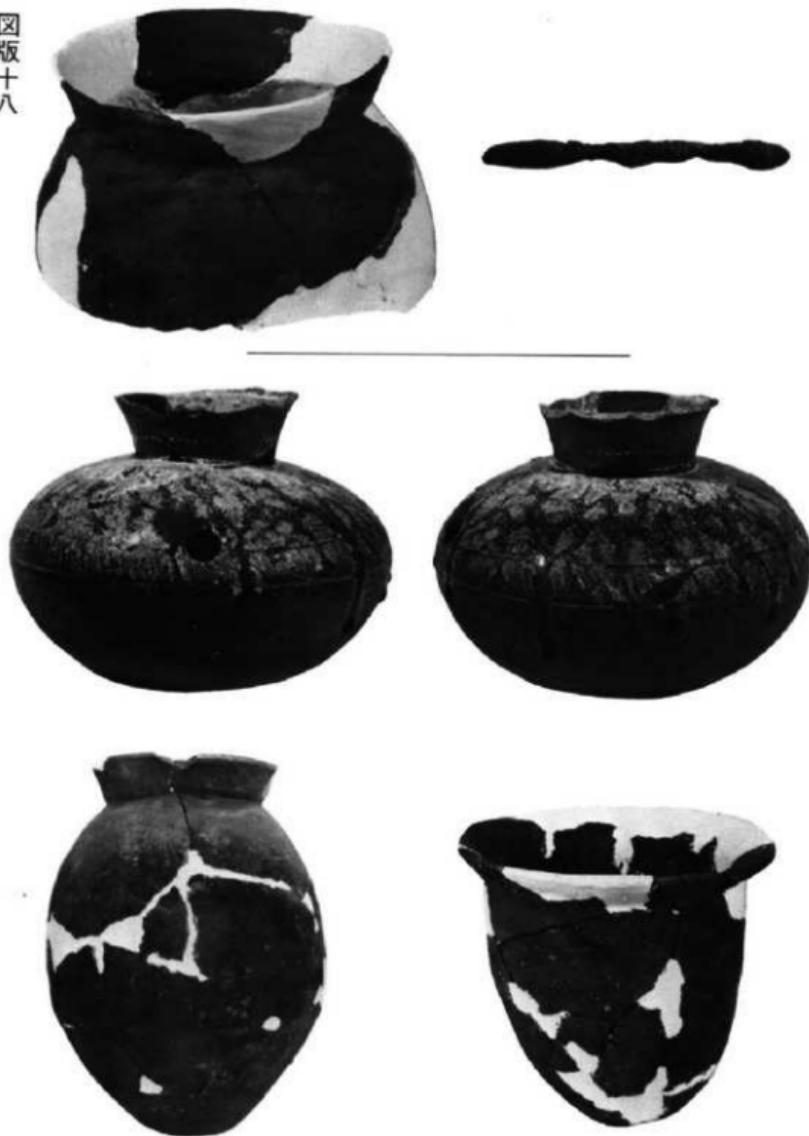
▲黑河内遺跡1、2号住居跡出土土器



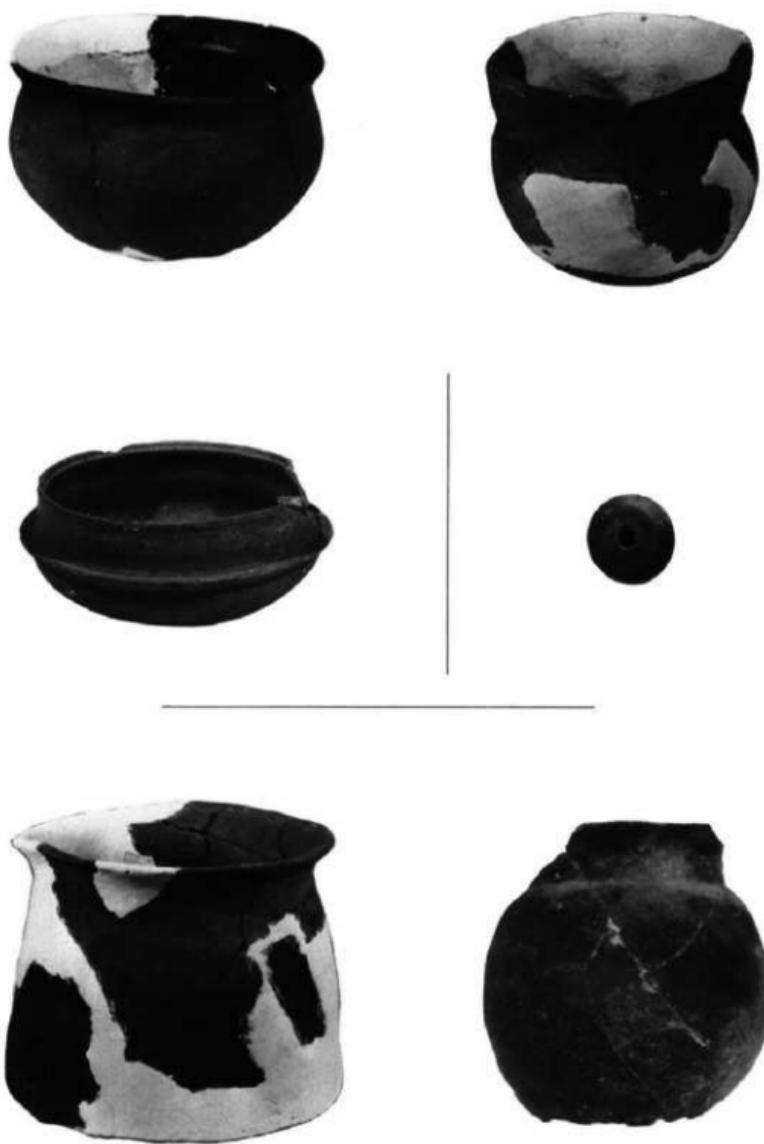
▲黑河内遺跡2号住居跡出土土器



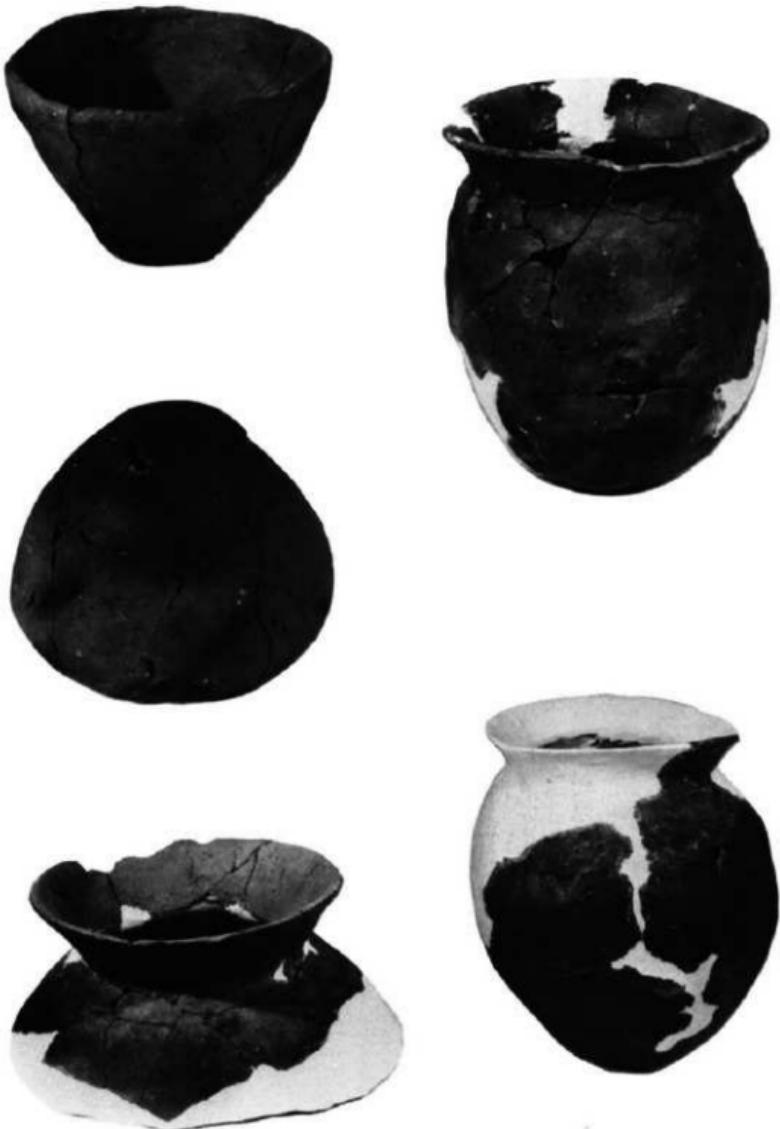
▲ 黑河内遺跡3、4号住居跡出土遺物



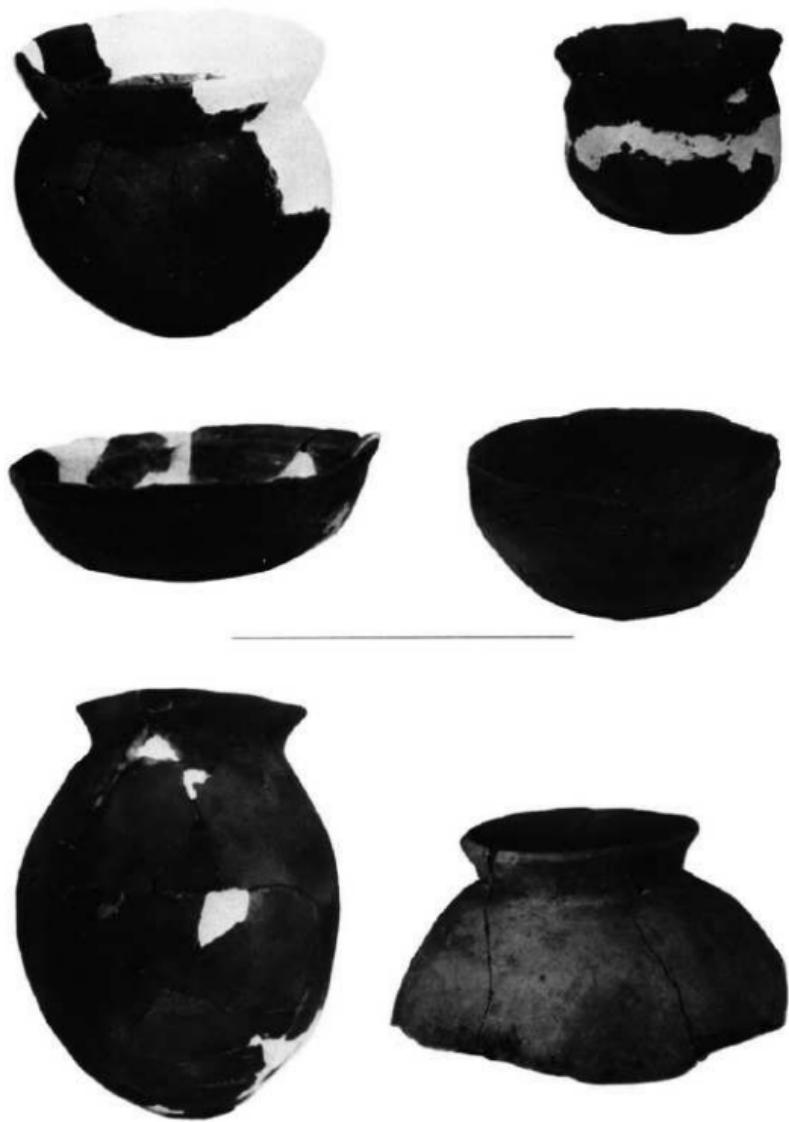
▲ 黑河內遺跡4、5号住居跡出土遺物



▲ 黑河内遺跡5、6、7号住居跡出土遺物



▲ 黑河內遺跡 8号住居跡出土土器



▲ 黑河内遺跡8、10号住居跡出土土器



▲黑河內遺跡10、11号住居跡出土土器

